

春なわすれそ

一

寒が明け、春一番が吹いた。

住宅の窓にはアルミサッシが全盛となり、室内から外の様子はとんとわからない。広沢のアパートには、まだ昔ながらの木枠の一間幅の窓があった。鍵も昔ながらの小さな廻し鍵である。その外側は、やはり木製の雨戸があり、細工物の二つの木片を左右や上下にずらせて鍵としている。

いまや一人暮らしとなった広沢は、目覚めると、厚手のカーテンの向こうに雨戸の隙間から射す明かり目をやる。風のある日には、雨戸や窓ガラスがカタコトと小さな音を立てた。雨の日は、外にその気配があった。朝の、そのひと時を広沢は愛でていた。

寝具の掛け物も一週間ほど前から一枚取り除けた。地球が確実に回っているように起床時の室内の気温も少しずつ上がってきていた。

昔ならオフロードバイクで元気良く乗り出したところだが、そろそろ梅もいいころあいたと思われ、その香りを聞きに近くの梅園に出かけた。

千坪もないだろうと思われる庭園には、説

明版によれば十種類近くの梅が植えられている。梅園に相応しく、老人や車椅子の訪問者も多いが、若い女性が独り梅を聞いているのも絵になる。晩年、近所に住んでいたという俳人・中村汀女の歌碑も建っている。

広沢にもかかって、仕事やその流れの食事会などでよく午前様帰宅があった。高度経済成長時代を支えた「企業戦士」そのものであった。そんな頃でも、週末には自分の子供をここへ連れてきたり、後輩たちと梅花の下で静かな酒宴を催したこともあった。三十年近くも通いつづけた梅園だが、売店や騒音を撒き散らすスピーカーもなく、昔のままの静かさを保っているのが嬉しい。

この近辺へ新婚で居を構えた頃、広沢は妻にぞっこんであった。広沢にとっては、雑誌の編集という仕事から、外資系の広告代理店での、PRというアメリカ生まれのまったく新しいコンセプトの仕事に切り込んでいくという、実に意欲的な頃でもあった。広告代理店といえば広告のコピーライターといって、消費者の心にぐさりと刺さるような美文を創作する職種があって、装飾も誇張もない実用的な雑誌記事を書いてきた広沢から見ると、鳥肌が立つような惹句のもとに、薄く白いレースのひらひらが舞うような華麗な広告文案を作っていた。



そのような広告代理店という華やかな業界に、さらに外資系という要素も加わって、社員には、この業界を志向する若者からは羨望の眼差しで見られていることを、やや誇りとも自慢とも思っているような気配があった。

そのような企業には、どういうわけかやたらに金子に不自由しない連中も多かった。女性社員どうしで、

ねえ、今日ちよっと二枚くらい貸してくれ
る？」

という会話を、聞くともなしに聞いている広沢たちにしてみれば、それは当然、千円札のことと、当時の妥当な金銭感覚としては思える。しかし、それは万札の話であった。広沢は大変な会社へは行ってしまったと、同じ境遇にいる男性同僚とため息をついたのであった。

ことほど左様に、明日、首を切られても路頭に迷うような社員はいないだろうな、と思えるのであった。

また、外資系であるがゆえに英語を聞いて話せる人間が多く、当時は英会話のできなかつた広沢は、ほう、たいしたもんだ、と思っていた。広沢は別に英会話を身に付けて紅毛碧眼の人種に跪くような仕事はしないぞ、俺は鉛筆一本で食っていく、くらいの習熟しきれていない青い考えをもって将来を見ていた。実際のところ、社員たちは日常の日本語会話でも名詞や動詞にカタカナを多用し、それを
で、に、を、は」で繋げたような話をするので、それを聞く広沢は辟易としたものだった。

あのさあ、そのリコメンってボスのアブルーバルをゲットしといたほうがいいんじゃない、もち、インアドバンスだよ」といった具合だった。なにもカタカナで言わなくなった方がいいじゃないか、と思うような内容だ。こういう人種は英会話の能力をはずしたら並以下の力しかないのでは、と思える人がたくさんいた。

こんな状況だから、昼食もタクシーを使っ

てホテルや著名レストランへと向かう。手弁当などを持参するものは一人もいない。しかし、この外資系企業が戦後日本へ進出してきて以来、初めて愛妻弁当を持参する社員がいた。それが広沢であった。

もの珍しさと冷やかしもあって、社内から女性がのぞきに来る。広沢にしてみれば、パンダの食餌を見られるがごとくで、落ち着いて箸も進まぬ。おかずのあれこれに付き、女子社員たちは蜂の巣をつついたようにいろいろと騒ぎ立てた。

広沢はその愛妻弁当が嬉しくもあり、自慢でもあった。自分が心から大事にし、また、相手も心底から慕ってくれる、こんな良い妻女は世の中にいない、と思っていた。その妻が拵えてくれた弁当だ。若い女性にも年上の女性にも好かれる広沢が、相手を崩してその弁当を食する姿には、普段、ハードな仕事を難なくこなしている面影は窺えない。

しかし、そんな新婚時代から十年もたった頃、広沢の前に彗星のように現れたのが由美子であった。広沢は、結婚を早まったのではないかとさえ思った。

二

広沢が由美子に初めて会ったのは、広沢が時々顔を出す銀座七丁目の落ち着いた小料理割烹「紬」であった。名物の柳にそろそろ芽がをのぞかせていた。L字型の白木のカウンターだけの店は十人も座ればいっぱいになってしまふ。低い背もたれのある椅子には、いつも糊の利いた白いカバーがかけており、それが女将の心意気を忍ばせている。カウンターの際には大きな花瓶に季節の花が活けられていた。

小料理は板前の順蔵が手際よく作って出してくれる。特にあれこれ注文しなくても旬の魚や野菜でひと通りのものは味わえる。順蔵

も暖簾をくぐってきた客には、その晩の腹具合をそれとなく探って、多くもなく少なくともない、いくつかの気の利いた小鉢で持て成した。また、清酒を飲む客、スピリッツ系を飲む客、それぞれの酒に合った小料理を工夫してくれるところが、通り一遍の板前と違うところであった。

「よっ、広さん、いらっしやい」

荷物を女将に預け、広沢は順蔵が勧められた椅子に落ち着いた。

「何だか照れちゃうね、こんな席だと・・・」

順蔵が勧めてくれた席は、L字型のちょうど角で、角が折れたところ、といっても隣の席になるのだが、先客としていたのが由美子であった。

「あら、どうして？」

黒系の生地にはグレイのストライプのはいたスーツに、純白の柔らかい生地のブラウス姿の由美子がいった。広沢は、由美子は初対面なのに何処かで話したことがあるような雰囲気包まれた。由美子は一人で飲んでいたのではなかった。彼女の向こうには広沢とは顔なじみの降旗が微笑んでいる。降旗は旧財閥系企業の子会社の社長である。その会社が広沢の勤める広告代理店の顧客であることはまったくの偶然に過ぎなかった。順蔵の説明では、由美子は降旗の秘書であった。

「あれっ、広さん、由美ちゃん、初めて？」

「うん、そうだけど・・・」

「どこかでお会いしてませんでした？」

由美子が少し広沢のほうへ向き直って、髪を片手でそっと耳へかけるようにして微笑みかけた。

実際のところ、何かのイベント会場か何処かで立ち話ぐらいしたことがあるような気もしたが、多分、人違いだろう、と広沢は思った。

「さあ、どうかな？」

順蔵によれば、由美子はその店に何回かは来ていたらしい。もちろん降旗と一緒のこ

とであった。

降旗と由美子は、今日は何かの会の流れで、すでにかなり前からいたようで、その分、由美子の口は軽快だった。広沢もそんな由美子にむしろ好感をいだいた。降旗のほうを気にしながら、広沢は由美子からビールの勺を受けたりしていた。

「あら、由美子さん、すいません」

由美子に勺をさせてしまったことに気が付いて、和服の女将が小股でつと二人に寄ってきたが、

「大丈夫よ、ママ。私たち二人でしますから、ねっ」

と由美子は女将を制して広沢に同意を求めた。私たち二人って、いま会ったばかりじゃないか、広沢は苦笑したが、そんな由美子の茶目っ気を自然に受け入れることができた。

降旗は、順蔵とゴルフの話しており、広沢と由美子のことなどは我関せずといった態であった。

由美子の猪口を干す指が、白く透き通るように瑞々しいのを、広沢は盗み見た。遠慮がちに広沢のことをいろいろ聞いては、

「おうん、そうなんだ」

「とか、

それはご冗談でしょ」

とか、初対面にしてはかなり親密な言葉使いただが、広沢の神経を苛立たせるようなことは微塵もなかった。

「お二人さん、盛り上がってるわね」

女将が広沢に新しい小鉢を運んできた。鮪と葱のぬたで、清酒の箸には広沢はこれがお気に入りであった。

「広沢さん、由美子さんてね、物凄くしゃりした秘書なんですってよ」

「そんなことないですよ」

「はいえ、ここへ来る会社の方が皆さん、そう、おっしゃってるもの」

「ゴルフだって社長が負けるときがあるんだってよ」

順蔵が口をはさんだ。

ええ？　ということは五十を切るのかな？

「はいえ、切るときもある、ということですよ」
由美子は、カウンターに置いていた広沢の手の甲を、爪があたらないように三本の指の腹で軽くトンと叩き、大きな目でいたずらっぽく広沢を見据えた。その指の花びらのような湿り気に広沢は思わず息をのんだ。

由美子と話していると、時のたつのを忘れそうであった。話題は尽きなかった。

広沢が次に由美子に会ったのも、やはり「紬」であった。出張から東京へ舞い戻った広沢は、羽田からまっすぐ「紬」へ来た。「紬」があるビルの入り口で降旗にバッタリ出会った。

お、お先に」

あれ、もうお帰りですか」

うん、ちよっと今日は疲れた」

それはいけないですね。お気をつけて」

あ、人質を置いてきたよ」

はい？」

「紬」の暖簾を上げると、そこには、順蔵をあいてに猪口を口にしてしている由美子がいた。女将は他の客の相伴をしている。

わあ、広沢さん。今日、絶対にいらっしやると順蔵さんと賭けていたのよ。わあい、お銚子一本いただきませす」

由美子は、席を立て、女将に代わって広沢から荷物を受取ると、広沢を自分の隣の席へと誘（ひざな）うように手を引いた。広沢は、由美子の指に、また何時かの柔らかく温かな「湿り気」を感じた。街で知らない人が見かければ、人を寄せ付けないような端正な感じを漂わせるスーツ姿の由美子であるが、このような打ち解けた仲間うちでは場の盛り上げにはかせない明るさを持っていた。

降旗さんがね、今日は調子が良くないから

先に帰るけど、由美子さんはまだ足りないだろうからって、無理やり残していったのよ」

順蔵がいった。

それでね、こんな日は広沢さんがいらっしやるといいなあって順蔵さんと話していたの。そしたらね、今日はいらっしやらないって順蔵さんはいくのね。今日は広沢さんが来るような気はしないって言い張るのよ。じゃ、賭けましようって、いま、お銚子を賭けたところだったの」

由美子は、子供のようにはしゃいでいた。由美子の話は相変わらず軽快である。ゴルフも良く知っているし、所作やスタイルからもそこそこのスコアは出るであろうことは想像に難くない。

今度、順蔵さんとかママとかみんなでしましょ」

今日の由美子は淡いピンクのブラウスを紺系のスーツで包んでいる。健気にも勺をしてくれるが、相変わらず透き通ったような白い指が広沢には眩しい。指腹の湿り気の記憶が広沢の感性を乱す。加えて、右隣に座っている由美子が、勺をするたびにブラウスの合わせ目のほんの少しの間隙から、その内側をほんの瞬間垣間見ることが出来る。桜色に染まった肌が梶子色の豊かなレースを押し上げては戻る。

由美子の話は、ゴルフからクルマ、そして野球、果ては財形貯蓄と、まさにテレビのワイドショーでも見ているかのように豊富だ。

さ、飲みましょ、飲みましょ、どうぞ、どうぞ」

話し上手で勺上手、そばに置くと酒量がかどる女性だ。

由美子が話しながら動くたびに、あれっと思うような香りが広沢の鼻先をよぎることがある。ヘアケア製品の香りでも香水でもない。由美子はいつも香水を使っていなかった。使っているかもしれないが、和食料理を出す

「紬」へ来るときには、料理の香りを損なわ

ないように配慮しているのかもしれない。その香りは由美子自身から立ち上る、若い女性のほのかな香りであった。

あのね……」

と親しげに広沢の耳元へ口を寄せてくると、余計にその香りが広沢の鼻腔を刺激した。それは由美子の口からの微かな香りと相和し、広沢を蠱惑的な世界へと陥れる。勺の度に由美子の胸の隙間は広くなる。広沢は、軽い眩暈を起こしそうであった。

由美子は酒席が好きで酒も強い。あるとき何かの具合で降旗らとカラオケに行ったことがある。降旗が、

なかなか聞けるよ」

というので期待していたら、それを上回るものがあって驚いた。

由美子の年齢は改めて聞いたこともないが、三十歳前後と見える。当然、降旗や広沢とは年代も違い、降旗が上手いといっても、彼女の世代の歌が上手いのだと思っていた。

ところが由美子が歌うのは、なんと演歌であった。ポップスをうたってもじっくり来そうなルックスなのだが、タイトスカートのスーツ姿は演歌にはミスマッチとしても、小節を聞かせ、唸りを入れた演歌は、オリジナル歌手もびっくりするくらいのできであった。

三

由美子が家族と住んでいる自宅は、広沢の自宅の割と近いところにあった。新宿から二本の私鉄で、二人の自宅へは別々の路線に乗っていくのだが、降りる駅の新宿からの距離はほぼ同じくらいである。したがって、南北に走る駅と駅を結ぶ道路をクルマで行けば一分もかからないのである。

そんなことから、みんなでゴルフに行くときには、由美子が広沢を彼女のクルマでピックアップすることになった。

クルマに乗り込むとき、広沢はなんだか彼

女の部屋を単身訪れたような気持ちになり、気分がやや高揚するのを覚えた。助手席に座ると甲斐甲斐しくもシートベルトを締められる。寄り添う由美子からのあの香りが、広沢の鼻を再びくすぐるのであった。車内中、由美子の香りに満ち満ちていた。

演歌でいいですか」

そういつて由美子は一時的に止めたらしいカセットテープを再び回した。まだCDプレイヤーは普及していなかった。

なるほど。演歌の源泉はここか。

ティッシュはそこね」

うん」

ご飯、食べました？ もしまだなら、お握り作ってきたから」

君が？」

もちろん、母じゃないわ。ほら、掌がまだ赤い」

由美子は、前を見て運転しながら掌を広沢のほうへ突き出して見せた。柔らかそうな掌の、お握りを握ったあたりに、桜色が少し残っていた。

後ろのシートにバッグがあるでしょ。お茶もポットに入っているから」

東名高速の瀬田ICまでは、早朝ということもあって広沢が乗車してから一分もかからなかった。むせ返りそうな新緑の中をクルマは朝日を背に浴びながら一路箱根方面へと向かっていった。行く手には富士山が鮮やかに見える。

握り飯を頬張ったりしているので、ゆっくり走っているのかと広沢は思った。しかし、食事は終え、飲みものも済んで一段落しているのに、由美子は相変わらず一番左の車線をゆっくりと走っている。

メーターを覗いて見れば八〇キロくらいだ。なあに？」

由美子が広沢に目を向ける。

いや、ゆっくりだね」

そうね。でもこのくらいが一番経済速度な

の。一〇〇キロで走っても時間的には十五分も違わないわ」

なるほど、それはドライバーなら誰でも知っている。しかし、実際にそう走るかねえ。酒席ではシャキシャキで頭脳明晰な由美子なので、百二十キロくらいで爽やかにぶっ飛んで行くと思ったので、少し意表を突かれた思いがした。

ゴルフでは、ベスグロはもちろん降旗であったが、ハンディ戦では由美子がベストであった。由美子は、誠に理にかなったきれいなスウィングでクラブを無理なく振り抜く。インパクト時にヘッドがよく走っているので、飛距離は男性陣を追い抜くこともあった。そんなときは、

「うん、これは良い」

といった後、えへへ、と行って皆にすまなそうに舌をチロリと出すのであった。

広沢も、酒に強く酒席が好きで、話しも好きであった。カラオケも同年輩のおじさんソングではなく、多少は気の利いた歌も歌う。お世辞とは承知していながらも、若い世代に誉められれば、悪い気はしない。クルマの運転も、若い頃はラリーをやり、サーキットを走ったこともある。ゴルフも同世代的には、そんなに悪い腕前ではない。スウィングもきれいだと言われてきた。しかし、執着心がないせいかスコアは一向に縮まらないでいた。

しかし、由美子に会ってみて広沢は、彼女が大きく年の離れる広沢と話していても何の臆することもなく伸び伸びとしてしているのは、何なのだろうと思ってみる。よく思い返してみれば、由美子は、酒量、酒席の会話、歌の上手さ、ゴルフの腕前、そしてクルマの運転と、これまで広沢が他の人から誉められていたすべての点で由美子が広沢を上回っているのではないか。そこに思いつくと広沢には愕然とするものがあった。

広沢には、由美子は広沢に会うことを楽しみにしている節が窺えることがしばしばあった。紬」から出て帰り道が違う降旗と分かれ二人で新宿へ向かう電車の中で、

「今度、いつぐらいに 紬」へ行きますか？」と、少し不安そうに顔を傾けて聞いたりすることが何回もあった。

昨今のように、携帯メールもなかった頃の切なく危うい別れ方であった。

いまから思えば、広沢はその頃ギクシャクしていた妻との間を清算し、由美子を引き寄せておけばよかったのかもしれない、と思った。車窓から見える市谷周辺の桜が夜目にも真っ白に満開だった。

四

由美子は、いつもこれで良かったのだと反省し、自分を納得させるのだが、そういう気持ちになること自体が不幸なのではないか、と思ったりもする。

二間のアパートで囚われの身のように、まもなく一歳になるうとしていた我が子のオシメを変え、乳を含ませ、寝顔に話し掛け、自分もうたた寝をするような毎日を送っていると、男とは何のための関わり合いだったのか、と思えてくる。子供自体は、自分が妊娠する前に考えていたよりはるかに可愛いものだし、こんな喜びは男性では絶対に味わえないだろうと思っている。また、正規の結婚はできていないが、出産しないまま老いるよりは、はるかに幸せなことだと、それが笑い顔であるにせよ泣き顔であるにせよ、我が子の顔を見るたびに思えるのだった。

男は、毎晩と言っているほど来てくれる。資金援助をしてくれるので、由美子は働かなくても生活には困らなかつた。いまは、育児に専念して、いずれはまた働くつもりではあつたが、それまでの間だけでもひと通りの生活ができることを男に感謝していた。

男は、子供が生まれる前ほどの元気がなくなつたように思える。由美子に求められて子供を認知して、生活費も自分から言い出して出してきていた。由美子はこのような境遇の女としては恵まれていると思つた。

ただ男が、由美子の指摘に対して表面的には闊達に振舞つてはいても、二人でアパートにいるときのふとした一瞬の間隙に、由美子は男の陰を鋭く見て取れるのだった。この男（ひと）変わったわ。

男は外面だけを良くしている、といわれる。それは女も同じよ、由美子はそう思つた。恋人どうして外だけで会つていれば、別れたときに恋しさはさらにつのる。しかし、結婚して同居しだすといういろと相手の生活ぶりが見えてきて隠し切れないものが気になりだす。

反対に、一緒に生活しだすと、相手のよさがさらに良く見え、お互いに敬愛の情がさらに増すことも多い。

また、離婚したあと、それまでの精神的ストレスから開放されたためか、嬉々として己の道を歩き始める人もいる。所帯疲れもなく、まさに第二の人生を謳歌しているかのようだ。

由美子は有栖川の精彩が確実に翳つたことを見ていた。

男は途中で止めるようなことがしばしばあつた。反対に、そんなに張り切らなくても由美子は十分愉悅に浸れるというようなこともあつた。男は由美子とは二十歳も離れているので、若い頃のように頻繁に女体に接したいとは思わないようだが、火照りきつた由美子の弾力のある柔らかさに絡まれていると、この世界のどこにもない安堵に浸れる、と由美子に話したことがある。

由美子は、男と知り合う前には閨事の経験は若干あつたに過ぎなかつた。しかし、成熟した男と初めて同衾してからは、回を重ねるごとに房事に習熟し、自分から男にそれとなくせがむことも多くなつた。一人の頃には考

えられない成長振りであつた。男はそれをすぐに察してくれて、由美子の身体と心を優しく癒した。意思を伝えた由美子が恥をかくようなことはしなかつた。それが由美子をさらに大胆にもさせた。

由美子から降りた男は、由美子の顔の上に乱れた髪を手櫛で整えた。火照り湿った腋窩に唇をそつと這わせる。

由美子がぐぐもつた短い声を発し、ビクンと小さく跳ねる。男は由美子の薔薇を探る。

充血が引かず、まだ熱く潤つたままの唇が男の指を飲む。由美子の腰がガク、ガクと小さくゆれる。完熟の中で静止した指に脈動が伝わってくる。由美子が切ない声で吐息をつく。

ねえ、お願い」

由美子は男の手首を押さえた。由美子は再燃焼の入り口に立たされていた。このまま行けば、男の帰りは明け方になってしまふ。由美子は自分の気持ちとは裏腹に、それを氣遣つた。

男は、由美子に優しく唇を合わせると、キツチンへと向かつた。

あっ」

陶然としたまどろみの中にあつた由美子は、秘唇全体が蒸したタオルで覆われるのを感じた。

男がいつもしてくれることだつた。終わつたら自分が男をきれいにしたりやりたいとは、いつも思うのだが、気が付くといつも反対であつた。男に翻弄される前は、男がそんなにしなくてもいいというほど献身的に尽くせたと、経験をつむごとに新たな男の喜びを知ることができた。

男は、由美子の花びらを一枚一枚きれいにぬぐつていった。由美子にはそれでまた芯が蕩けるのだつた。いくら拭いても溢れ続ける。男はタオルを止め、唇で音を立ててそれを啜つた。

おうっ」

由美子は喉の奥から搾り出すような野太い声を発し、腰を上げ、しばらく止めて埒なくドスンと尻を落とした。揺れた白い太ももが男を扇情した。

「ねえ、やっぱり帰るの？」

「ややあって、由美子はいつもと同じ事をボツリと聞いた。」

「ごめんね」

男が由美子の胸に触れようとしたとき、由美子はタオルで胸を覆った。いつもの繰り返した。帰るなら、もう触らないで欲しい。でも、帰らないでいて欲しい。男の優しさと残酷、わがまま、それを自分で見極めなければならぬのが辛い。

起き上がれない由美子を思って、男はドアの外から鍵を掛けていった。由美子は男にひと目、子供の寝顔を見て帰って欲しいと思った。

由美子は、自分の指を止められなかった。ビッグ・ディナーをご馳走になったのに、まだ食べたいの？ 手を両膝できつく挟みながら、由美子は自分の火照る身体を咎めた。冬深い頃だった。

五

由美子が勤めていたK社は、旧財閥系企業の子会社で親会社の製品を輸出したり、親会社が使う原料などを輸入していた。由美子は、その企業の社長の秘書であったが、その社長も、また会長も、もともとは親会社の人間であった。

由美子は卒業と同時にK社へ入社し、秘書課へ配属され、最初は営業部長の秘書兼営業部の庶務業務を一手にこなしていた。由美子は新卒ながらその業務にすぐに習熟した。その頃、各企業に普及し始めたが、まだ一部署に一台程度のパソコン業務も難なく覚えてしまい、人事部からの要請で、他の部署の秘書たちにも教えて歩いたりもしていた。

業務処理や電話対応、来客への対応など、K社は部門間の仕切りのない机配置なので、由美子の働きぶりは自然と他部署の部長の目にもつく。人事異動期には、各部長から人事部長へ「由美子コール」が集中した。公平処遇が原則の人事部長は、思案の挙句、なんと由美子を社長秘書に抜擢したのだ。社長のかねてからの要請でもあった。

旧財閥系の子会社K社では、社長や会長の秘書には社歴が長く、社内事情に精通した女性が就いており、その秘書室は若い女性社員からは「大奥」と呼ばれていた。部長職クラスでも会長や社長の秘書には一目置いていた。ある時、由美子は社長の降旗から会長室に行くように指示を受けた。

会長の仲村は、本社の役員であったが十年前にK社の社長に就任し、二年前には自分の子飼いの部下であった降旗に道を譲り、代表権付きの会長となった。本社時代は海外駐在も長く、社内の部下からの人望も厚かった。

由美子は社長の指示でこれまでも、社長とともに会長主催の接客の宴会に何回か同席したことがある。仲村は、客へのもてなしが自然で嫌味がなかった。客に話しを向け、それを受けて自分も関連した話を切り出す。海外駐在が長かったからか、あるいはもともと博学多才なのか、西洋の都市の歴史に詳しくあった。それをひけらかすでもなく、さらっと話してにこっと微笑む顔に由美子は好感を抱いた。客がその博学に感心して仲村を誉めると、

「いや、年の功です、年の功です」と軽くいなしてしまふ。

河岸を変えて銀座のクラブなどへ行っても、興に乗ってボードレールの詩をフランス語で吟じたりした。シャンソンの「雪が降る」も、よく、ピアニストと呼吸を合わせながら原語で歌ったりする。酒を飲んでも崩れるわけでもなく、みんな楽しんで語り、そして歌う。こういう人が教養ある人のお酒の楽し

み方なのかもしれない、由美子はそう思った。

由美子は会長の秘書に目礼をした。秘書は、黙ってドアを指差した。会長が部長時代から仕えている秘書だそうで、深海魚のようにじっとドア番をしている。軽く、しかし、しっかりとノックした。

「どうぞ！」

仲村の大きなどら声のような声が聞こえた。社長から、会長が呼びだとお聞きしました」

「ああ、突然で驚くかもしれないが、ゴルフと一緒に行って欲しいんだ」

「はい？」

もちろん、接客ゴルフだ。来週の火曜日で、先ほど決まったところだ。先方さんが二人なので、君に入ってもらえばちょうど良い。プレイは腕加減しなくていいよ。降旗君には了解を取ったが、君の仕事の都合も聞いてくれ、とのことだった。相変わらず部下思いの奴だ」

「はい。私是一向に構いませんが、鈴木さんは・・・」

由美子は会長の秘書である鈴木瑤子の立場を気遣った。

「うん。でも彼女は婆さんだから・・・」

と、仲村は口到手を当て声を潜めて、目をドアの方へ向けた。少年がふざけながら母親の悪口を言っているようだった。

それに、何よりも彼女はゴルフはほとんどできない。練習に行ったことがある程度らしい。他のところで頑張ってもらうから気にしなくていい。それから、その日の君の仕事は秘書課長に代役を頼んでおくから心配は要らない」

六

野鳥の声を聞いて富士山を見ながらのゴルフは、誰にとっても快適であった。由美子は、会長や客たちと同じくレギュラーティからプ

レーをしたが、スコアは百を少し越すくらいで、自分ではまずまずだったが、他の三人はそれよりも良かった。しかし、第二打がいつもクリーンにヒットしてくれたので、スコアとしては良くまとまったといえる。パターの打数は、四人の中で一番良かった。それをプレー終了後の席で、仲村に指摘されたことが嬉しかった。客の二人も感心し、パター談義でひと盛り上がりした。

会長車で由美子とともに都内に戻った仲村は、クルマをHホテルへ着けさせた。都内では格式のあるホテルとして知られ、国賓級の外国人もよく宿泊する。

疲れたろう。今日はどうもありがとう。この後、特別に用事でもなければ、ゆっくり食事でもしたいが、どうだろう」

運転手の耳を憚ってか、仲村はクルマを降りてからそう言った。

「はいえ、私こそ、今日一日楽しませていただいて、どうもありがとうございます。お役に立てたでしょうか。その上、お食事なんて、とんでもございません。会長もお疲れでしょうから、ここで失礼させていただいてよろしいでしょうか」

「いやいや、用事がなければ、ぜひ一緒にお願いしたい。私も寛いで少し君と話がしたくてね。会社でも時々そうは思うけど、立場上なかなか段取りがつかない。いいだろう、いい機会だし」

仲村が微笑んだ。

由美子は、かねてから仲村の人柄には好意を抱いていたし、仲村が酒席で話す話を、お客さまのいないところでもう少し聞いてみたい気もしていた。しかし、会長と一秘書とでは、あまりにも立場が違いすぎるし、年齢も親子以上も違う。そんな二人が公共の場で二人きりで食事をしているところを、誰かに見られないとも限らない。直属の上司である社長とでさえも、由美子にしてみれば憚られる

のであった。こちらの二人が気が付かないまま、密かに目撃されることもあるのだ。会長ともなれば政財界にお知り合いも多かるうし、やはり二人だけのところを目撃されるのは、仲村のためにも不都合であった。そんなことに気が付かないほど、仲村も若くはないのに。由美子は少し逡巡した。

「じゃ、私に任せて貰っていいね。少しここで待っていてください」

仲村は、フロア・マネージャーの方へ歩いていった。離れた位置から二人の会話を見てみると、フロア・マネージャーとは知り合いのようだった。

何処かのレストランの個室を、と思ったのだが、どこも予約が入っているらしい。マネージャーのアイデアで部屋で食事をすることにしたよ。いいだろ」

戻ってきた仲村がそう言った。

いくら食事のためとはいえ、ホテルの部屋で仲村と二人つきりになることに、由美子には一抹の不安がよぎった。しかし、同世代の男性でもあるまいし仲村がオオカミに急変するとは思えなかった。その心配はすぐに消えていった。

部屋へはいって由美子は少し安堵した。それは由美子が考えていたようなベッドに小テーブルと椅子があるだけの部屋ではなく、食事などができるような次の間付きのセミ・スイートの部屋であったからだ。安堵はしたものの、こんな高そうなお部屋でお食事なんてと、由美子は仲村に散財をかけてしまうことになった成り行きに少し後悔した。

「何を食べようか」

メニューを見ながら、仲村は少年のようにはしゃいでいる。中華かイタリアンか和食かといういろいろ二人で話したけれど、メニューを探しながら仲村がいろいろと話してくれた地中海沿岸の話に興味がひかれたので、由美子

はイタリアンに決めた。

「コース・メニューにするか？」と聞かれて、それもちょっとへビーな感じがしたので、単品で好きなものを食べたい、といったら、仲村もそのアイデアに同意した。コース・メニューに挑むほど空腹ではなかったし、仲村が言った、養豚場の豚のように、シェフのあてがいぶちを黙々と食べるのも主体性がないしななあ、という台詞ももっともだ、と由美子は思った。海鮮もののマリネや仲村が勧めるパスタ、香りの高いチーズ、そして仲村がお勧めだという赤ワインなどを頼んだ。

押さえに握り鮭の美味しいところを一人前、頼んでおこう。お茶もね」

仲村はいたずらっぽく微笑んだ。イタ飯のべに鮭を頼むという唐突さが、由美子には新鮮であった。

ヨーロッパ駐在も長かった仲村は、食の話に通じており、由美子はやはりここまで来て良かったと思った。パスタの原料やオリーブ油にも精通している。何を聞いても応えてくれそうだ。

「今日はお料理教室に来たようです。お話がとても面白いです」

あのね、食べ物について話ができるというのは、ひとつの文化なんだよ。酒についても同じだね。食と酒の歴史を訪ね、原料と製法を繙き、生産者の苦労と工夫に耳を傾ける。調べるのも楽しいし、語り聞かせるのもまた楽しい。そういう背景を知っているといいのでは、味もぜんぜん違うと思わないかい？」

その通りだと由美子は思った。皇室の方は、いつもこのようにして、食の専門家の話を聞きながら美味しいものをたべているのかな、由美子は少しリッチな気分浸っていた。

仲村の話を聞いていると、あっという間に料理が届いた。食事も仲村と一緒にしているといっのまにか皿が空いてゆく。会社で見かける仲村は、大柄な身体にいつもスーツを端正に着こなし、笑い顔を見ることもほとんど

ないが、今日はゴルフの帰りという事もあって、洋服はカジュアルだし話しぶりも砕けた感じなので、由美子にしてみれば祖父と食事を楽しんでいるようであった。

由美子さん、お願いがあるんだけど」

仲村は由美子をファーストネームで呼んだ。社内では勿論、苗字で呼んでいるが、今日はプレーの初めに客の一人が、

由美子と呼んでいいですか」

と由美子の同意を求め、由美子がお愛想よく、はいっ」

と答えたので、それ以降、仲村は由美子をそう呼んでいた。

何でしょう？」

いや、恥ずかしながら、年のせいかも知れんが背中が痛い」

えっ、大丈夫ですか？」

大丈夫だ、慢性的なものだ。成人病ならぬ老人病だな。ゴルフをしたからではなく、むしろゴルフをするとすこし良くなる感じがする」

まあ、老人だなんて、まだまだ、お若いですよ。背中叩きをすればいいのでしょうか」

うん、そんなもんだが、そんなもんでもない」

はあ？」

その、私の背中に乗って欲しいんだが・・・えっ？」

私がうつ伏せになるから、その上に乗って、こう、膝で歩くようにして欲しいんだ。肩のあたりから腰の辺までね。いつもは孫に会うと乗ってもらっているのだが・・・」

私がですか？ でもお孫さんより、私、ぜんぜん重いですよ」

大丈夫、大丈夫。娘に、つまり孫の母親にもしてもらったことがある。ベッドでは下が柔らかくて上に乗るのは難しいから、この床の上でしょう」

そういって仲村は、バスルームからバスタ

オルを何枚か持ってきた。それを広いところに敷くと、その上にさっさとうつ伏せに寝込んだ。

じゃあ、頼むよ」

仲村は、何の臆することもなくそれが当然のごとく言った。

由美子は、そんなことをして気持ちがいいなら、そうしてやりたかったが、どのようにしていいかわからなかった。

あの、私を跨いで、手を私の肩に着いて・・・、そうそう。それで片足ずつ私の背中の上に・・・そうそう・・・うん、四つんばいになるようにね」

由美子は恐る恐る、仲村の言う通りにする。

仲村の背中の上でバランスを取るのに少しコツがいるが、何とか乗り上げた。

重くありません？ 痛くないですか？」

うん。大丈夫だ。気持ちがいい。うーん、うーん。それで、バランスをとりながら、膝で少しずつ前にゴリゴリ歩いてみて・・・。

そうそう。うまいよ。うーん、うーん」

由美子は、注意をしながら膝頭で仲村の背中を下から上へ、そして下へと何往復かした。

うーん、気持ちいい。はあーっ、気持ちいい。うっ」

といて、仲村が身体を少し横にひねった。

きゃっ！」

由美子はバランスを崩して仲村の横へ落ちた。半ば上を向いた仲村の腕の中である。

あ、申し訳ありません。落ちちゃった」

由美子は急いで起き上がろうとしたが、仲村の腕が由美子の身体に柔らかく絡んでいる。

うーん、気持ちよかった。でも、こうしているのもいい。少しの間、動かないでくれ」

仲村は、由美子の肩を大きな手で優しく包んだ。仲村の手が温かかった。由美子は仲村の腕枕の中で両手を胸の前で軽く握って、仲村と横向きに向き合っていた。若い男性とこんな状況になれば、不測の事態を招来しかね

ないかもしれないので、素早く立ち上がらなければならぬだろう。しかし、一緒に食事をしたことや、そうする内に仲村の性格などもより深く知ることになったためか、そういう気にはならなかった。仲村の腕から体温を耳に感じていた。仲村の微かな体臭に目を閉じた。

仲村は由美子の方へ向きなおり、由美子の髪を手で梳くようにした。静かな時間が流れた。

土へあがるう」

仲村がベッドへ移ることを促した。由美子は仲村の腕から開放されたが、身体は甘美の中を漂流していた。ここで止めなくてはと、頭の中では躊躇はしたものの、仲村に背中を押されてベッドへ横になってしまった。自然の流れであった。

仲村は、由美子の脇に横たわり、胎児のように丸くなった由美子に再び腕を貸した。腕を優しく撫でられ、その仲村の手が由美子の背に回った。蕩けるような感覚の中で由美子は仲村が誰なのかを思った。会社で見る威厳のある仲村といまここに居る仲村とは、まるで違っていた。

由美子は、幼いころ急逝した父を思った。川の字で寝る父と母との間で、こちらを向くと柔らかな母の乳房、反対側をむけば大きな固い父の胸、そうしてあちらを向いたり、こちらを向いたりしているうちにやがて眠りについた。

男たちに抱かれたことがないではないが、いま仲村に抱かれているような感覚はいちどもなかった。由美子は仲村の胸の中で、背や腰に仲村の手を感じながら安堵の中に浮いていた。仲村の優しい吐息を顔に受けながら、由美子は仲村の唇を自分の唇に感じ、ふと、顔を引いた。

どうしたの？」

仲村が言った。仲村の顔が父親から男へと変わって見えた。優しそうな男の顔だった。

胸が高鳴った。そう、なるのだろうか。由美子は臆気に思った。身体も考えも自分のもののように思えなかった。仲村の手が由美子の胸をそっと押し上げる。由美子は仲村のシャツを二本の指で握っていた。自分のシャツが腰から引き抜かれていくのがわかる。シャツから片方の肩がはだけさせられ、腕を抜かれる。

仲村が大きな手で由美子の胸を優しく撫でる。指先が乳房の先で戯れる。仲村が再び由美子に唇を近づけていった。眼を閉じている由美子は、仲村の吐息を間近に感じて、少し開いた唇で仲村の唇を探した。

仲村の唇が由美子の唇を待っていた。それを探り当てた由美子の唇は、引き合う磁石のようにすっと仲村の唇に重なっていった。仲村の舌の導きに由美子は付いていった。仲村が引いて、由美子がそれを追いかける。仲村が押してくると由美子はそれを受けた。仲村がもっと深追いすると、由美子は奥の方で動かなかった。仲村が呼んでいる。由美子は勇躍として出て行った。

仲村がリードし舞台は仲村の方へ移る。仲村が由美子をエスコーストして仲村の中を案内する。二人は軽やかにうねりながら仲村の中を散歩する。仲村は、由美子が一瞬気を抜いたときに隠れる。由美子が探す。あら、あそこにいるのに。出てきて。背中が見えてるわ。ねえ、出てきて。あん、それじゃ私から行っちゃうから。

由美子はこれ以上伸びないほど舌を伸ばし、仲村の中を右へ左へ、そして円を描くようにして仲村の舌を捕らえようとする。腕を仲村の首に絡めて引きつける。それでも仲村は出てこない。

ああん、もうっ」

由美子は、仲村の胸を叩いた。

仲村は、由美子に覆い被さるようにして、由美子の髪を手櫛で梳きながら、由美子の唇

を覆った。今度は優しい訪問だ。由美子は仲村の熱いぬめりに深い吐息が出た。自分が少しづつ潤んでいくのがわかる。

どのくらいの時間が流れたのだろうか。由美子はふと意識が蘇った。目の前に仲村の顔があった。

「お、起きたか」

仲村が微笑んで、由美子の頬をチョンとつづいた。由美子は自分が最後の薄物すら身に付けていないことに気が付く。仲村はといえば、上半身は裸のようであった。由美子はいろいろと思い起こそうとしても、霧の中を歩いていくようでよくわからない。でも、仲村に最後まで優しくされたことは、どうしても思い出せない。私だけが良くなってしまったのだろうか。そんなことって、あり、なのだろうか。

由美子は思う。仲村だって歳はとっても男である。由美子を愉悦の海に泳がせるだけ泳がせておいて、自分には男としての何の快楽がなくてもいいのだろうか。娘より若い女を喜ばせるだけで満足しているのだろうか。自分だって少なからず仲村に好意を抱き、何の躊躇もなくベッドに登ったではないか。何が起こっても仲村に素直に従えるだけの気持ちの高まりはあった。何か申し分けない事態になっっているのではないかと思った。

「あのう」

「何だね」

由美子の髪を自分の指に絡めるようにしながら仲村がいった。

「何ていっていいかわからないんですけど、私、最後までよく覚えてなくて申し訳ないんですが、・・・あの・・・自分だけよくなっちゃったのでしょうか」

「どういうこと？」

「だから、・・・その・・・仲村さんも一緒に気持ちよくなれたのですか」

「・・・そんなこと、どうでもいいじゃない

か」

「何か、私ひとりで・・・あの・・・そうなんか」

「そんなことはないよ。君と一緒にいると何か、その、ありふれた言い方で申し訳ないけど、若い息吹きというか、若い女性の香りというか、エネルギーをたくさん貰った気がしてね。気分は爽快だし、背中にも乗って貰って身体もラクになった感じだよ」

「でも会長、生意気なこと言って申し訳ありませんが、私も子供ではないし、こういうときに男の方がどうなさりたいかは承知しているつもりです」

「君の気持ちは、とてもありがたい。しかし、私くらいの歳になると、若い頃のようにはいかないもんなんだ。恥ずかしい話だが、もうかなりの間、女性に触れてなかったからね。触れようという気も起こらなかった。あれこれ気を使うのも煩わしいしね。しかし、君のことが気になるようになってからは、昔のように、何というか、いい方は品がなくて申し訳ないけど、ムラムラと来てね」

「まあ・・・」

「でも、きょう、この部屋で君と一緒にいると、何か大事な宝物をいただいたようで、とてもドキドキしてね。しばらくなかったね、そういう気持ちは。君はこころも身体も素直だしね。ずっと大事にしたいと思っているよ」

「身体もって？ 会長、そんなにおっしゃっていたら、ありがとうございます。でも、私って会長のそのようなお考えに応えられるようなものを持っていないと思います。そんなに買い被られても、困ってしまいます・・・」

「そんなことはない。君は何も繕わなくても、そのままいてくれればいいんだよ」

「ありがとうございます。・・・でも、私も会長になにかして差上げたいんです。私だけじゃ、何か、何とっていいのかわからず、中途半端というか、片手落ちのような気がして」

「君の話聞いてみると、会社にいる昼間の

君のようだね。優秀な秘書のようだ、ははは」
あん」

由美子は仲村の胸にすがった。仲村も由美子の顎をあげて優しくキスをした。

「・・・いいですか？」

何が・・・」

「・・・だから・・・」

由美子は仲村の下着へ手を添えた。仲村を探る。仲村の目を見ている。仲村も由美子の目を見ている。きれいな瞳だと思った。

あっ、可愛い」

えっ」

可愛い、か。仲村は思った。それは由美子の素直な感想なのだろう。最近の若い女性は、何かにつけて「可愛い」を連発するので、場合によっては「素敵」とか「きれい」とか「素晴らしい」「美しい」などと、仲村の世代では置き換えて理解する必要がある。しかし、いまの由美子の「可愛い」という表現は、どう考えても「小さい」という風にしか理解できない。

男のものを捕まえて、「可愛い」とは何事か、とひと昔前なら声を荒げるところだが、今では実際のところ「小さくて可愛い」であろうことは論を待たない。しかし、それは自分の努力不足に起因するものではなく、万人に訪れる「加齢」によるものだから仕方がない、と仲村は思う。由美子はその「可愛さ」を気に入らなくて仲村の元を今後離れてしまうなら、それも致仕方ないところである。

でも私、こういう、柔らかくて可愛いの好きです」

そういって、仲村の目を見た。しょうがない娘だ、仲村は苦笑いした。

久しぶりの女人の手は、由美子の手ということがあるかもしれないが、仲村には新鮮な感覚をもたらした。自分でも信じられないくらいな速さで、自分が息づき、嵩（かさ）が増していくのがわかる。

動かしていいですか？」

うん、頼む。でも・・・」

でも、何ですか？」

難しいかもしれないよ」

そうですか？ そんなこと、わかりませんけど・・・」

長い由美子の指がしなやかにしっとり絡みつく。由美子の手が妖しく動く。前後に動かしたり、強く握ったり弱めたりする。由美子が目をつぶっている。自分が何処かを愛撫されているかのように唇を微かに開け恍惚としているのが何とも愛しい。

仲村は、由美子の唇を指で撫でた。由美子の唇が仲村の指を追う。仲村は指を由美子の口に泳がせ、それを抜くと追ってくる由美子の唇を自分の唇で優しく受けた。由美子は仲村を握りなら、自分のなが再び潤んでくるのを感じていた。由美子が目を開けた。

いいですか？」

何？ ああ、お願いしよう」

それを聞いて、由美子ほもそもそと後退りするように身体を下げていった。

仲村は、熱い蜜の中に自分の先端が漬かるような感覚を得た。

うっ」

何年も忘れていた懐かしい感覚であった。熱い蜜壺は次第に深くなり、意識が次第に柔らくなるようだった。由美子は両手と口を総動員して奉仕してくれている。仲村は、シートをそっと上げた。由美子の汗ばんだ顔に、髪が張り付いている。

暑いだろう、こんなの被っていても・・・」
由美子はいたずらっぽく目を返したが、そのまま続けた。由美子の胸がほんのり紅色となって揺れている。ウエストと、腰と脚のくびれが由美子の動きに連れて、長くなったり、短くなったりしている。

仲村は、足の裏が熱くなってきた。由美子が啞えているところから、その足の裏まで、

由美子の舌の動きに連れて熱い波が瞬時に流れる。由美子は口で啞えながら、掌で丸みをほぐすように弄ぶ。仲村は久しぶりの閨事に我を忘れる思いがした。自分に力が漲り、まだ自分にもこんなにエネルギーがあったのかと思うほどだった。

わあ、すごい。気持ちよくなりました？」

由美子は手を離して仲村を見ながらいった。

うん、こんなになるとは思わなかった。恥をかかずに済みそうだね。いいかい？」

よろしいですか？」

そういつて由美子は仲村を内股気味に跨ぎ、仲村を自分に導く。しかし、すぐに案内しないで、自分と仲村を擦り合わせるようなことをしている。仲村は、昔、初めてのとき、ぬめりがある漠然としたところで、どこへ収まるのやら焦燥したことを想い出した。いま、由美子はそんなことで困惑しているのではなからう。来るべきことに、十分な期待を持つてのアプローチであった。ほつれ髪が汗ばんだ頬に張り付き、眉間に小じわを寄せ、目を閉じて、そのときを自分で調整している。

あっ

由美子が微かな声を上げ、両手を仲村の胸についた。下から見上げる由美子の顔は、普段と違うように見える。両の乳房が惜しげもなく仲村の前にたわわになっている。スーツの下にこんなに魅力的な胸が隠されていたんだ。仲村は大人気なく高ぶって、腰に力が入った。由美子が、か細い長い息を吐きながら、静かに静かに腰を下ろしてくる。

仲村がすっかり由美子に飲み込まれたとき、由美子は上体を仲村の上にゆっくりと倒してきた。乳首が仲村の胸に触れ、乳房が押しつぶされ、そして由美子は温かく柔らかい肉の塊となって仲村を覆った。

はああ

由美子は仲村の首を両手で巻き込むようにした。胸の鼓動が伝わる。由美子はビクビクと腰のあたりを痙攣させる。

仲村は、目くるめくようなひと時を送った。由美子を誘導してやると、由美子は白い身をそらせ嬌声を漏らし、髪を振り乱して嗚咽しながらどこまでもどこまでも上っていった。

由美子は途中で何度か、大丈夫ですか、と仲村を気遣うことをいつてくれたが、愉悦のさなかでも自分に気を使ってくれる由美子を仲村はもう離せないと思った。しかし、由美子にもはつきりと老体と意識されていることが癢に障ったが、それも事実だしどうにもできないことであった。

由美子に嬌声にまみれた大きな声でせがまれて、仲村はタイミングを合わせて、由美子の中に激しく果てた。頭中の血が一気に失血したように一瞬目の前が真っ白になって、本当に身体に不具合が生じたのか、と思ったほどである。

目の前の由美子は、一糸まとわぬ完全な自失状態で、仰向けになつて行儀悪く脚を開き、片脚を丸の字に曲げたまま微動だにしない。仲村は若草を撫で、由美子の薔薇を掌で覆った。潤んで蒸れている薔薇が脈動しているのが感じ取れ、自分にまた力が入りかけるのを、苦笑いした。

由美子がとろんとした目を開けた。

あ、また、ごめんなさい」

良かったんだね」

はい。ああ、恥ずかしいわ。私、声、出ました？」

由美子が仲村のほうへ寝たままくねくねと寄ってきて、仲村の手を両手で握った。

いや、そんなことはないよ」

しかし、実際のところ、由美子の声が廊下に漏れやしないかと、大きな柔らかい枕で由美子を覆ったのだった。由美子も一時はその枕を抱きしめていたのだ。

起こしてくればよろしかったのに。ずっとご覧になっていたんですか、私の顔」

うん、可愛い寝顔だったよ」

あ、きれいにしてあげます」

由美子は、仲村がかけているシーツを静かに剥ぎ取ると、仲村の下半身にまつわりついた。

あ、いいよ、そんなことしなくても」

仲村は身をよじったが、由美子がそうはさせなかった。

後悔してないかい？」

二人して枕まで申し上がった。仰向けに寝ている仲村の胸に、由美子は片方の胸を押し付けるようにして、仲村の乳首と戯れていた。

由美子の片脚が仲村の片脚に掛かっている。

由美子の火照りが冷め遣らぬ薔薇が、仲村の脚に密着している。時々由美子は腰を仲村の脚に微かに擦り付けるようにする。

君ぐらいいい娘なら彼氏がいるんじゃないかと思ってるね・・・」

「はいえ、後悔なんてしていません。以前から会長を尊敬していました。そして今夜、こんなに優しくしていただいて、さらにお慕い申し上げられるようになりました。私の方こそ、会長のお誘いにこのこ付いてきて、最初のお食事のときからこんなことになってしまつて、会長からご覧になれば、今の娘は尻が軽いなんて思われているんじゃないかと、少し反省しています」

そんなことはないよ。私もしばらくこんなことをしたことがなかったけど、とてもよかった。今日も一日、君がそばにいてくれただけで、何か若々しい女性の馥郁たる香りを十分満喫できたしね。最初は君とこんなになるうとは思ってなくて、食事だけだと思っていただんだよ。ところが、君に背中を踏んでもらっているとき、君が一度、足を滑らして私に尻餅を着くように馬乗りになったときがあったでしょう」

はい」

そしたらね、君のね、あそこがね、私の背中に押し付けられたのよ」

ま、いやらしい」

そしたら、何かだんだん私の男が昔を思い出したようになってね。いつのまにか、こうなっちゃった。あ、こちら」

仲村は、由美子が仲村のものを優しく握ったのをたしなめた。

君は、よかった？」

はい、とっても。いままでで初めてです、こんなによかったの。こんなことをいっただいぶん遊んでいるように思われるでしょ？ふしだらな娘みたいですよ、でも、こんなことあまり知らないんです」

「これから、会ってくれるかな」

はい。会長がよろしければ・・・」

大事にするよ」

ありがとうございます」

仲村は、由美子の頭を後ろから髪を梳くようにして引き、優しく唇をつけた。由美子は伸び上がって、それに応えた。

七

松島は、由美子の会社の取引先の営業部長であった。学生時代、応援団長を務めたというだけあって、身長は一八〇センチをゆうに超えるりっぱな体躯をしていた。四十歳にはなろうというのに言葉使いはハキハキと青年らしく、身のこなしも爽やかであった。日に焼けた顔から真っ白い歯がこぼれるのが印象的である。

由美子は、役目柄、客へのお茶出しはよくするが、来客の中でも好感の持てる男性であった。その松島と由美子がただならぬ仲になるきっかけは、まさに奇遇というしかなかった。

由美子は、平生はまったく健康で、持病もなく、大病の経験もない。しかし、気候が不順なときに体調の優れないときが重なったりすると、一時的に目まいがしたりすることが

あった。女性には、良くあることだった。

その日は朝から、アパートの出口の紫陽花に鬱陶しい雨が降りかかり、体調も優れなかった。窓が曇り、人いきれのする京王線の満員の急行電車で揺られていると、胸が次第に苦しくなり、意識が途切れそうになっていた。冷や汗が流れる。速く、次の駅に着かないかと、やきもきしている内に、電車は明大前駅へ滑り込んでいった。ここで降りよう。このベンチで一休みしよう、由美子はそう思った。

ドアが開き、後ろの人に押されるようにして車外へ一歩を踏み出したとき、目の前がすーっと暗くなっていき、ホームに座り込むように倒れていったと思われた。

いっぽう、そんなことはつゆ知らず、松島は明大前駅で新宿への乗換えで急行電車を待っていた。ドアが開くとあわただしく人が吐き出されてきたが、その内の一人の女性が夢遊病者のようにふらあつとこちらへ倒れかかり、松島の足元に崩れ落ちた。女性の片手が松島の片足の靴にかかった。

「ギャー」

ほかの若い女性の悲鳴も上がった。

誰かが、

「担架、担架！」

と叫んでいるのも聞こえた。

泡を食った松島ではあるが、女性が濡れたホームにしゃがみこんで洋服が汚れてはいけないと、とっさに女性を抱き上げた。大柄の松島には、たやすいことであった。隣にいた老婦人が、由美子の傘を拾ってくれた。松島は由美子を取りあえずベンチへ座らせたが、由美子の身体には芯が入ってなく、すぐ崩れてしまう。自分が横へ座って由美子を支えた。由美子の膝が緩まないように押さえてやった。

そのときになって松島は、それがK社の社長秘書・由美子であることに気が付いた。商

用で何度かK社を訪れており、由美子にはコーヒーを出して貰っていた。妻子持ちとはいえ、微かにときめくものがある女性だった。駅員が由美子を担架で医務室へ運んでくれた。松島は、自分のジャケットを由美子の下半身へかけてやった。

医務室とはいえ、駅事務所の一角をパティションで仕切ったものであった。救急車を呼んだほうがいいと駅員はいったが、その頃には由美子の意識が戻っており、由美子がそれを断った。少し横になっていれば大丈夫だから、その時間をくれと駅員に頼んだ。

由美子は、意識が戻るにつれ、付き添っていてくれているのが松島だと気づき、大いに驚いた様子だった。しかし、意識が途切れている間、自分を知っている人がそばにいたことを大変あり難がって、松島に丁寧に礼をいった。

松島にしてみれば、自分はたまたまその場に居合わせただけで、由美子でなくても同じようなことをしただろうといった。それを聞いた由美子は、親しい間柄なら拗ねても見たかったが、会社の取引先の人でもあるし、そんなことはできなかつた。かえって、松島の実直さを見たような気がした。

八

松島が由美子から食事の誘いを受けたのは、それから一週間ほどしてからだった。取引先の社長の秘書ではあるし、松島には緊張感が走った。由美子はどうしても過日のお礼がしたいと、半ば強引に約束を取り付けた。

由美子が松島を案内したのは、新宿や渋谷などの繁華街ではなく、明大前駅近くの小洒落たイタ飯屋であった。客席数十五席くらいの落ち着いた店であった。インテリアは、白い漆喰の壁を基調に、焦げ茶の梁を廻らし、二人ずつのテーブルには白と茶のテーブルクロスがかかっていた。小さなグラスには、

松島の知らない花が浮かんでいる。もうひとつの小さなグラスにはロウソクが灯され、炎が小さく揺れている。松島は身体を小さくして腰をかけていた。こんな洒落た店にはあまりいったことがない。

「ここ前にお友だちと来たのよ。ここなら、お互いに帰り道だし」

由美子は、淡いグリーン系のワンピースであった。化粧にも幾分気合が感じられる。会社では、スーツ姿の由美子しか見ていない松島は、すっかり女性らしく装った由美子を見て少し驚いた。

由美子の話は、松島にとっても楽しかった。パスタやオリーブ油、チーズやワイン、それぞれに由美子の蘊蓄が傾けられた。イタリア料理なんて子供がいない頃、妻と何回か行ったくらいで、あとは大盛りのスパゲッテイくらいしか食べなかった。

由美子は、見かけは立派なレディだが、実際は少しも気取らなく、松島に優しくかった。

ほら、これ美味しそうでしょ。はい、お先にどうぞ」とか

あら、いま何か落ちたわよ、膝の上、ほら」
あ、ネクタイに飛んだわよ」

あの、すみません、オシボリお願いします」
そういつて席を立ち、松島のネクタイの汚れをオシボリに移したりした。

後はクリーニングに出せば大丈夫よ」

子育てが忙しい松島の家では、妻が松島のことをそんなに気にしていられない。また、静かで良いと思って結婚した妻は、年を経るごとにそれが陰湿で難しい性格であることがわかってきていた。松島は、由美子を長雨の後の太陽を見るような気持ちで仰いだ。

由美子は、

わ、面白い」

え、どうして、どうして」

と、聞き上手ぶりを発揮した。松島はそれに乗せられたように、ラグビーのこと、六大学野球のこと、学生時代の応援団の合宿や厳しい訓練のことなどを、子供のように嬉々として由美子に語った。

何か、初めてのお食事とは思えませんね」
そうだね。あなたといると、とても楽しい。

家族みたいだ」

家族みたいだ・・・？ 由美子は一瞬、その言葉に引っかかった。

そうですね。お父さん！」

お父さんはないんじゃない。そんなに離れてないよ」

そうですね。ごめんさい、お兄さん」

笑みを交わす二人の顔に、ロウソクの炎が揺らいた。

お兄さん、今度いつ会っていただけですか？ お忙しいでしょうけど」

二人は、それぞれの手帳を繰って日程を調整した。

その後、松島は由美子の会社へ何回か行った。会社では、由美子は事務的な話しかしなかった。食事をしたのだからもう少し打ち解けてくれてもいいのではないか、松島はそう思った。しかし、由美子は松島との食事を機会につっけんどんになったわけではない。いまままでと同様、笑顔を絶やさず好感の持てる対応であった。

由美子は、松島と食事をして、当然のことではあるが、今までに知らなかった松島の面を見た。松島は、由美子が会社では明るく快活であったが、二人で食事をしていて、ふと話題が途切れたりしたとき、一瞬ではあるが由美子の顔が曇ることがあることに気がついた。由美子は気を利かしたつもりで、松島の妻へと話を向けたが、そのとき松島は何か短い言葉で話を遮ったような気がした。それは、その話題への重たいドアを閉められたような気がした。その晩のディナーのほんの一瞬の

出来事であった。

仲村から由美子の携帯電話に連絡があったのは、由美子が松島と食事をした晩、最寄駅から自宅へ夜道を急いでいるときであった。今度いつ、時間が取れるだろうか？
はい、私はいつでも。会長はいつがよろしいのでしょうか？」

来週の木曜日がゴルフだね。その後、予定はないから」

では、木曜日にどこにしましょう？」

新宿のHホテルはどうだろう。あそこならあまり知り合いも来ないだろうし。部屋を取っておくから、まっすぐ部屋へ来てくれないか。ところで、何を食べる？」

うーん、会長にお任せします。会長は？」

私かね？ 私は・・・そう、君をいただよ、ははは」

ま、いやらしい！ いけない方ね」

由美子は歩きながら、周囲に配慮して声を潜めてそういった。

九

松島が由美子を案内したのは、新宿・歌舞伎町のはずれ、職安通りに面した韓国料理店だった。職安通りは、いまや韓国街ともいえるほど韓国料理店が林立している。韓国食材を中心としたスーパーマーケットもあり、看板もハングル文字が目立つ。

しかし当時は、昨今のようにコリア街と呼ばれるほどの賑わいはなく、知る人ぞ知る穴場のような地域だった。

松島が案内した韓国料理店は、客席十数席余りの小さな店だった。しかし、新宿の歓楽街で夜働く韓国女性などが出勤前に腹ごしらえに来たりして、狭い店は賑わっていた。松島の説明によれば、その店は付近一帯の韓国料理店の中でもっとも古い店とのことであった。

女性客が多いということは、美味くて安いということですよ」

そうかもしれない、由美子はそう思った。何が美味しいのかしら？」

由美子は、壁にあってあるメニューを見回した。カタカナと漢字とハングルが入り混じって、文字面だけでは料理の想像がつきにくい。

何でも。ここは気取らない家庭料理が出ます。私のお勧めはケジャンかな」

ケジャン？ ケジャンって何ですか？」

ケは、カニのこと。ジャンはユッケジャンのジャンで辛みそのこと。つまり簡単にいえば、生のワタリガニをキムチ漬けにしたものですね」

「えーっ、美味しそうですね。じゃ、それいだけどうかしら」

あとはブルユギ、これは日本のスキヤキと焼肉をミックスしたようなもので、少し味がついています。あとは魚料理とかキムチ、それからサンチュ、これはサラダ菜ですね」

飲みものは？」

飲みものは、韓国焼酎がベスト・マッチングですね。眞露とか鏡月は聞いたことがあるでしょ。でも最近ではチャミッスルとかイプセジュなどのブランドもはいつてきていますよ。イプセジュはボヘという会社のブランドで、ボヘってね、宝の海って書くんですよ。チャミッスルは眞露から最近出たブランドです」

「え、松島さんって、詳しいのね。この間のお食事のときは食べ物の話が出なかったの、きょうは少し驚いちゃった」

それから、明日は土曜日だからニンニク、OKでしょ？」

そうね、月曜日までには臭い、とれるわよね。元気になるそうね。お肉とかニンニクとか。太っちゃうかしら」

大丈夫ですよ。毎日食べるわけではあるまいし」

由美子は松島が、食べる前から元気いっぱいなのを目を細めて見ていた。

由美子は最初、ケジャンを見て腰が引けそうだった。カニが、殻ごとキムチ和えのようになっているからだ。第一、どうやって食べていいかわからない。

すみません、お姉さん、ハサミを貸してください！」

松島が従業員に頼んだ。松島が手際良く殻に切れ目を入れてくれた。この人は、スプーンやナイフやフォークより、こういう野性的な食べ方が向いているんだ、由美子はそう思った。

由美子は、箸でケジャンを摘み上げた。しかし、殻が硬いのでケジャンは挟まれても安定しない。落ちそうだ。

あ、あのね、それは箸なんかじゃ駄目。こうやってね手でつかんでしゃぶるんだ。そして、歯でね、身をしごき出すの。そして焼酎をキューッとやるのさ」

由美子は松島を見ていた。この人、土人みたい、そう思えた。

由美子は恐る恐るケジャンを口に運んだ。キムチ漬けとはいえ、そんなに辛くない。むしろ、ほのかな甘さを感じられる。松島に教えられたように、上下の前歯で身をしごき出す。

うーん、美味しい。生のカニの柔らかい淡泊な身にキムチがほどよくしみわたり、口いっぱいに香りが広がる。由美子は、いままでにこの種の食感の食べ物を味わったことがなかった。

美味しい。今日、松島さんにつれてきていただいで最高です。うっれしい」

だろ。これはね、本当に美味しいですね。ここへ連れて来た連中の誰もがそういう」

あら、そんなにたくさん女性をお連れしているの？」

えっ？ いや、私の場合、男ばっかですよ。女の人は由美子さんが初めてですよ」

松島はそういうと、ショットグラスのストリート焼酎を一気におおった。

焼酎はここに。ストリートだけど」

えっ、ストリートですか？ 何度です？」

二十五度です。韓国では普通、全員ストリートで飲みます」

水もいれないで？」

はい。無しです」

強くないかしら？」

強くないですよ。二十五度といたら、濃い目の水割り程度ですね。第一、韓国焼酎を割ったら美味しくないですよ」

あ、美味しい。甘いですね」

松島の説明を聞きながら、由美子はすでにグラスを口へ運んでいた。由美子も酒は強い方である。

でも、酒は強制されて飲むものではなく、自分が飲みたいように飲むのがベストだと思いますよ。赤ワインでも白ワインでも肉や魚に関係なく好きな方を飲んだらいいと思います。その内に、どのワインがどの料理に合うか自分でわかるんじゃないですか？ だから韓国焼酎も、もし水割りにしたければ、そうすればいいですよ。ロックもおいしいですよ」

私、小さい氷一個入れていいですか？」

どうぞ。どうぞ」

韓国料理や韓国焼酎についての松島の蘊蓄は相当なものだった。また、この店の料理ではないが、ユブクロ 豚の子宮) 炒めやホーデン 豚の睾丸) の刺身、土手 雌豚の大陰唇) やツル 雄豚の輸精管) の串焼きなど、いわゆるゲテモノ系の知識も豊富で、耳年増」の由美子でも舌を巻くほどであった。松島がその説明を、勿体をつけて話したり、由美子に疑問を投げかけるようにして話すので、由美子は驚いたり笑い転げたりした。

この間も楽しかったけど、きょうもいろいろ話ができ楽しいですね。由美子さんといるとすっかり気が緩んでリラックスできるんです。でも、ひょっとして好きな人がいるの

ではないかと、気を揉んだりすることがあります」

松島は、由美子の瞳をまっすぐ見つめていった。

「まあ、私にそんな人いません」

そういつてから由美子は、仲村のことを思った。由美子の気持ちの中には、仲村の存在が大きい。仲村無しの自分は考えられなかった。仲村への尊敬、仲村への思いやり、仲村がいることによる安堵感、仲村から受ける優しい愛撫。由美子は仲村の大きな揺り籠のなかで毎日を送っている自分を感じていた。

どうして、自分に好きな人がいない、なんて平気でいえるのだろう。由美子は自分の口を呪った。自分がはしたくない女に思えた。もし、自分に仲村のように愛している人物がいることを、ここで素直に告白したら、松島はもう、自分と食事なんかしてくれなくなってしまふのではないか。そんな小利口な女の浅知恵が、その発言の根底にあったのかもしれない。

「ええっ？ 本当にいないんですか。そうかなあ。由美子さんのように話が面白くて性格もとても素晴らしい人なんて、そうそう、いませんからね。おまけにきれいじゃないですか」

「えっ、きれい？ 私が？ そんなこと由美子はしばらくいわれたことがなかった。昔は可愛いとか、気が利くとかいわれて嬉々として仕事をしていたころもあったが、三十歳を超えようになると、なかなか、そのような誉め言葉を面と向かっていう人は少なくなってきた。たとえお世辞でも、そういつてくれると思わず頬が緩んでしまう。」

「まあ、お上手ばっかりいつて、お兄さん！私も松島さんのようなざっくばらんな方、好きです。持って回ったような言い方をする人いつて、私、苦手なんです。あっ、飛びましたよ」

由美子は、松島のシャツにとんだ食べ物の

小さな汁を新しいオシボリできれいに拭き取った。

由美子の香りが松島の鼻腔をくすぐった。

店を出ると、酔って火照った頬に夜風が快かった。

「酔ったみたい。久しぶりよ」

「うん、私もだ」

でも、韓国焼酎って美味しいですね。病み付きになりそう」

二人は、職安通りを横切り、新宿駅の方へと歌舞伎町のなかを歩き始めた。

その時、由美子の携帯電話が鳴った。仲村からであった。由美子は一瞬迷ったが、呼び出し音をミュートにして、携帯電話をバッグへそっと落とした。いま、電話には出られなかった。仲村さん、ごめんなさい、由美子はそう思っとうなだれた。「帯はラブホテル街で、趣向を凝らしているが静かなネオンが、密やかに客を誘（ひざな）っていた。」

「あっ」

由美子は、突然の出来事に驚いた。

松島が、由美子の肩を優しく抱くや、すぐ横にあったホテルの門の中へと入ってしまったのだ。

由美子さん、申し訳ない。どうしても優しく上げてたくて・・・」

「でも」

突然のことに由美子は胸が高鳴り、言葉が出ない。自分がどうしてよいかわからなかった。仲村の顔が浮かんだ。こんなことになつて仲村に申し訳が立たないと思った。

「甜暴だと思っています。最初から、こんなホテル街に近い韓国居酒屋を選んだのだろうと思われるかもしれませんが、そうじゃない・・・じゃ、出来心かといわれればそうでもない。ただ・・・」

松島は自分が釈然としないことにいらだた

しさを感じた。妻子のことが脳裏に浮かんだが、妻への罪悪感が湧くほど、もう二人の仲は近くはなかった。

でも、私・・・」

由美子がそういういいかけたとき、後から若いペアが入ってきたので彼らに通路を譲った。由美子は、いけないところを先生に見つけられた小学生のように俯いてしまった。若いペアの方はそんなところですれ違っても、何の羞恥心もないようだった。最近の若い人たちは人気のあるホテルの前ではペアで列を作ったりして順番待ちをしながら、前後のペアとホテルの情報交換をするという。

由美子は、先ほど、好きな人はいないのか、松島に聞かれたとき、なぜイエスと言わなかったのかと悔やまれた。

私は、もし由美子さんが嫌というなら、ここへ入らなくてもいいです。嫌という人を何が何でもという気持ちにはなれません。でも、由美子さんだって、まるで私の気持ちに気が付いていないとは思えません。もし、どうしても嫌なら、お帰りになってもいいです。私も、そうされれば、諦めがつきます」

・・・ああ、私に判断を任せないで・・・仲村さん、ごめんなさい・・・由美子の胸は千々に乱れた。

由美子には、松島に抗って一人でここを出て行く勇気がなかった。お互いに、二回の食事ですっかり打ち解け、二人の感情の壁が自然に絡み合う心地よさを感じていた。松島が言う通り、松島の自分に対する好意的な感情を察知していないではなかった。それは二回の食事以前から、由美子が松島に仄かにいっていた感情でもあった。由美子の気持ちの中には、不謹慎ながら松島の優しさに触れて見たいと思う芽が育ち始めていた。

松島は、無言で由美子の肩を優しく抱くとフロントの方へ歩き始めた。由美子は黙ってそのエスコートに従った。これ以上抗うのも、

はしたないことだと思った。

部屋へ入って、松島は由美子のバッグを手からはずしてやった。由美子を抱き寄せる。

由美子が松島を見ている。目を閉じた。松島は由美子の唇を初めそっと吸った。一度離して、舌を進入させていった。由美子が少し口を離すと、大きな呼吸をしてから自分から唇を寄せてきた。松島の首に両手をかける。松島は由美子の腰に手を回し、ヒップを掴んだ。やや量感のある由美子の腰が松島の腰に押し付けられる。松島は自分が、由美子の柔らかい膨らみ押されて次第に嵩を増していくのがわかった。

二人でベッドへ腰をかけ、倒れるようになつた。

尻の軽い女だと思ったでしょ。そう、思われたくないけど・・・」

そんなに自分を責めることはないよ。誘った私が悪いんだから。あなたは悪くない」

でも、私、断らなかつたし。帰ることもできたのに」

断つても無駄ですよ」

えっ、どうして？」

私は、あなたが好きだからです」

松島は、由美子を抱き寄せ激しく由美子の唇と舌を吸った。

ああ、わたしもあなたが好き！」

松島に翻弄されながら、由美子もそう口走つた。

松島は、由美子の太腿にストッキングの上から手をかけた。横になつて悶えている内に、由美子のスカートはずっと上の方へずり上がってしまった。由美子は両腿を合わせて松島の手を拒む。松島はそうはさせじと、手をさらに上へと這わせる。松島が由美子の唇を責めると、由美子の膝が緩む。その隙に、松島の手は一気に最奥地まで達した。

あん」

松島の手は、湿潤で柔らかく熱いものに挟まれた。脈動が伝わってくる。由美子は腿を

きつく閉めたまま松島の手の動きを止めた。

あの、シャワーを浴びてきてもいいですか？ もし、よろしかったらお先にどうぞ」

うん、一緒に行こう」

えっ、でも、私・・・恥ずかしいもの・・・お先にどうぞ」

松島は、そういわれて仕方なく一人でバスルームへはいった。

断られるのを承知で、恥をかくのはわかりきっていたが、どうしても自分をコントロールできずに、咄嗟に由美子の肩を抱きホテルへ入ってしまった。断われれば、きまりが悪くて由美子の会社にも行きにくくなる、せっかく親密に心を通わすことができるようになったのに、それも白紙になってしまう。そんなことは重々わかっているのに、今夜はどうしても由美子に触れたかった。

バスルームから出ると、由美子は松島の衣類をハンガーに掛けてくれていた。

気分、変わりませんでしたか？」

知りません。意地悪」

由美子は、髪を揺らしてバスルームへと消えた。とはいっても、この種のホテルの構造は普通のホテルと違って、バスルームとの仕切りが曇りガラスになっているので、中の動きがわかってしまう。由美子の裸身がおぼろげながら動くのがわかる。松島は気分が高まり、自分が大きくなるのを自覚した。

ほどなく由美子は、バスタオルに胸をくるんで出てきた。脱いできれいにたたんだ自分の洋服をソファアの上に静かに置いた。松島は、自分が掛けていたシーツを開けた。由美子はバスタオルのまま入ってきた。

これは、とらなくっちゃあ」

松島は、由美子のバスタオルを剥いだ。

あん」

由美子は松島の方に横になったが、両手で胸を隠した。レース装飾のある白い下着もつけていた。

あれ、これ、はいてるの？」

だって・・・」

由美子は、どのように振舞っていいかわからなかった。身体が馴染んだ仲村とは、今では一緒にシャワーもし、お互いに洗ったり、バスタオルで拭いたりしている。シャワーの後には下着をつけずにベッドへ行くのが普通であった。仲村がそれを望んでいた。

しかし、松島とは今宵が初めてである。松島にしても由美子が、このようなところは初めてとは思っていなくとも、由美子の手慣れた様子を見るのも興ざめであろう、由美子はそう思った。

松島は、由美子の唇を荒々しく吸った。手が由美子の胸を弄る。脚が由美子の脚を割って入ってくる。松島の口が由美子の口から耳、そして喉へと移り、あっという間に乳首を含まれていた。

松島の舌が由美子の乳首を呼び起こす。早くも乳首が硬く反応していくのを由美子は恥ずかしく思った。仲村に開発された由美子の乳首は、だれかれにかまわず反応する好色女のそのように思われることを、由美子は懸念した。それは隠したかった。お願いだから、そんなに早く反応しないで・・・。

乳房や乳首を手で丹念に愛撫しながら、松島の口はわき腹から腰、そして股間へと移っていった。

松島の手が由美子の下着に掛かった。仰向けに寝ているのでそのままでは脱がせにくい。松島に協力して腰を上げればいいのだが、そんな手慣れたことをすることは由美子にはできなかった。由美子は、松島が脱がせやすいように横向きになり、ヒップを突き出した。

そうすれば、松島がヒップ側に手を掛ければ、果物の皮をむくように一回の動作で難なく薄物を取り去ることができる。既婚者だから、そのくらいはわかるのではないかと思われた。

最後の薄物を取り外すと、松島は、激しく、そして優しく由美子を責めた。由美子に休ませることなく責めぬいた。由美子も最初の内

は、遠慮がちに自分をコントロールしていたが、松島の手や唇が堰をきった洪水のごとく由美子に襲い掛かってくるので、ついには我をも忘れて喜びを叫び、更なる攻撃を懇願した。

——嵐が去った。松島はくの字にうねって横たわる由美子の後ろから、しとどに濡れた薔薇を見ていた。ときどきその薔薇がうねる。そこに一匹の生き物が蠢いているようだ。いまは静かにうごいている。つい先ほどまで、どんなに激しく律動しても松島に噛み付いて離れなかったのと同じ生物とは思えなかった。松島は薔薇に息を吹きかけた。薔薇が、そつと蠢くのがわかる。

「ああん」

由美子が微かに声を上げた。松島は、また吹きかけた。

「ぎゃっ」

由美子が身体を起こした。

「あん、松島さんだったの。何かと思ってとても驚いたわ。いやらしい人」

由美子は松島の腕の中へするすると忍び入るように入り、松島の腕を枕にした。

「ごめんなさい。知らない内に眠ってしまった。淋しかった？」

由美子は松島にそつと唇と押し付けた。

「だって、とても激しかったんですもの。何回も何回も息が止まりそうでした」

「とても可愛かったよ。私も久しぶりに快楽を味わった」

「久しぶりなの？」

由美子は松島と妻とのことを思った。

「うん、もう何年もこんなことはなかった。とても気持ちよかった」

「いつもの松島の顔が、そこにはなかった。」

由美子は、松島のことを挿んだ。

「あ、駄目だよ。また大きくなっちゃうよ」

松島が素晴らしい終わらぬうちに、それは由美子の手の中でどんどん大きくなっていった。

「わあ、すごい、すごい。どうしよう。ねえ、

どうして欲しい？」

由美子は両手に余らんばかりになった松島の硬いものを握って、松島の目をみた。

「動かしてくれませんか？」

「はい」

「そういわれて由美子は、松島のを動かし始めた。」

「うう・・・、いい気持ちだ・・・由美子さん、そこにキスしてもらっていい？」

「はいわよ」

「そういうと由美子は、巧みに身体をずらせていって、松島のをマイクロフォンのように顔に近づけた。じつと見つめて、口を「う」のようにして松島にそつと息を掛けた。」

「おっ」

松島は腰を引いた。由美子はそれを追いかけて、松島の先端に口をつけて、少しずつ含んでいった。柔らかく熱い肉に松島は包まれた。由美子の舌が動き、手がボールやスティックを器用に愛撫した。松島は、受身いっぽうであつた。由美子は初めて攻撃権を得たように、跪いて松島の上に屈み、松島を攻め立てた。

由美子の乳房が由美子の動きにつれて揺れている。今宵、この姿勢は初めてなので松島には新鮮な眺めである。自分の前立腺の辺りがぎゅっと締まる。手を差し伸べてそれを掌で受けた。柔らかくて気持ち良かった。

「あ、ちよっと待って」

「どうしました？」

「ちよっと・・・ちよっと休んで・・・」

「気持ちよくなってもいいわよ。私、お口で受けてあげる」

「そんな、いいですよ、そんなにしてくれなくても」

「私はいいのよ。そうしてあげたいの。松島さんさえよければ・・・」

「そういって由美子は手を速め、舌を執拗に絡めた。」

「ううっ」

松島は快楽の坂を一気に駆け上った。由美

子は顔を松島から最後まで離さなかった。

松島はティッシュペーパーを由美子に渡した。由美子は松島を清めた。

そうじゃなくて、口の中のものを・・・」

おふん、飲んじゃった」

由美子が微笑んだ。

ええっ、飲んじゃったの？」

松島はそんな由美子が愛しかった。由美子を抱き寄せた。由美子の唇に指を這わせた。

由美子の唇を吸った。由美子の薔薇に手を伸ばした。薔薇にたどり着くまでの一帯がぬめっていた。

はああ」

由美子がか弱く吐息をついた。

はい気持ち。そっと・・・ね、そっとしてね・・・」

十

その日、終電車には間に合ったものの、満員状態の中で由美子は何とか立っていられるものの、身体の芯が抜けたようだった。

いったい、この車両の中で私のように、一時間前は男の腕の中で乱れきっていた女性がどのくらいいるのだろうか、と思われた。

また、夜遅くの帰宅途中、団地の中を通り抜けるとき、いったい全世界の何%くらいの男女がいま同衾しているのか、思うことがある。団地がスケルトン構造になっていたら興味深かろう、とも思う。由美子は、自分は異常なのだろうか、と考えた。

この世に男と女がいる限り、性愛はついて回るものだ。むしろ、それによってより円滑で深遠なる男女の仲ができていくのだろう。セックスレス夫婦とか結婚処女とか世間ではいうが、大人であり生物である以上、性愛は自然な営みなのだ。日中は仲がよくても性的不仲といわれる夫婦は、何かしら障害があっ

て性愛を二人の絆にできないのだろう。それは人として生まれてきて不幸なことなのではないかと由美子は思う。結婚はしていないが、由美子は性愛による男女間の気高い絆を知りつつあった。

三十歳を過ぎて、結婚したい男に恵まれないとはいえ、身体は成熟していく。それについて性愛への要求が高まるのも自然のことであつた。性愛による肉体的快楽もさることながら、それぞれの狡猾さや愚かさを知り、相手の気高さを悟り、相手を慈しむことができず、精神的に満ち足りることの方が大きな意味を持つていると思うのであつた。まだ現れぬ将来の伴侶へ操を立て、純潔を守るというモラルも大事なことに違いない。しかし、そんなことを三十代になっても四十代になっても守り通すことに如何ほどの価値があるのか。由美子にはそれはむなしいことだと思つた。

とはいえ、由美子はそんな考えが今の自分を正当化しているのではないか、と思うこともある。仲村にあれば目を掛けられ、自分も仲村を尊敬し、大事な人と思つている。

それが、ふとしたことが縁で松島と心を通わせるようになった。松島の一途さや爽やかさは、老練な、いまの仲村にはないものだ。仲村を慕っているとはいえ、他の男から食事の誘いがあり、それに応じるのも、いまの由美子には自然なことに思える。

しかし、今宵のように情を交わしてしまうのはどうか。今宵も断固として断れば断れないことはなかった。だが、毅然として断ってしまうより、松島との親密な時間を共有する方に、由美子はよりいっそう動かされた。そして、そうすることにより、単に肉体的に翻弄される快楽だけではなく、肉体的に松島に愛される中から、言葉では得られない松島の優しさや素晴らしさを見出すことができた。そう思うのは、松島と濃密な時間を過ごし、別れたばかりだからであろうか。

松島との時を過ごしから、由美子の仲

村に対する気持ちは微動だにしていないことに気付く。仲村に会いたいと思うし、仲村の腕の中で甘えてみたい。仲村に愛されるのは、日本舞踊のように味わいのある雰囲気の中で時がゆっくり過ぎていくような気がする。気分的にも肉体的にも徐々に高まっていくのだった。

これに対して、松島との時間は、突然やってきた台風のように、あれよあれよという間にもみくちやにされ翻弄されて、やがて浜辺に打ち上げられたような気がする。その間、ロック・ミュージックが鳴り渡る。その感覚に由美子は酔った。松島からはなれることは、今の由美子にはもうできそうもなかった。由美子は、自分が多情でふしだらな女だろうかとも考えてみる。しかし、それは自分には相応しくない決め付け方だと思った。

その翌週、由美子は給湯室で百合の花を売っているときに、会長秘書の瑤子に声を掛けられた。

由美子さん、先週、あなた新宿にいらっしやらなかつた？ 確か金曜日の夜、遅くだと思っただけ」

金曜日ですか？

金曜日は、松島と食事をした日だ。

そう、金曜日よ。私はお友達と食事をして、遅くなったのでタクシーで帰るところだったの。都電通りの信号で信号待ちをしていたら、その前をあなた方が通ったのよ。まったく偶然ね。男性と一緒だったかしら」

都電通り、という辺りが瑤子の年齢を感じさせる。昔は、歌舞伎町の南端を都電が走っていたのでその名が残る。現在では靖国通りと呼ばれている。

瑤子は、由美子が松島と駅へ向けて都電通りの信号を渡るところをタクシーの中から見ていたのだ。タクシーの中から外は良く見えるが、外からタクシーに誰が乗っているか、

普通は注意が向かない。いずれにしても松島と深夜、歌舞伎町界隈を歩いていたのを目撃されたのだ。松島とは初めてのことであったし、なれなれしく腕を組んで歩くほど由美子は軽薄ではなかったのは幸いであった。

相手の方は何処かでお見かけたことがあるような気もしましたが・・・」

瑤子は、年少の由美子に対しても丁寧な言葉使いだが、多少の意地悪さが感じられる。

十一

瑤子は、いまだに独身であった。かつては「ミスK社」ともてはやされたころもあったらしい。今でもその気配がないではない。身のこなしに品があった。着るものに対して若い女性からの評判がよかった。

いわゆるハイミスの瑤子が、社内の女性から怖いと恐れられながらも、いったん、気を許す機会があった若い女性からは、母、姉のごとく慕われ、いろいろな相談に応じてやれるのは、結婚こそしていないが相応の辛酸を舐めてきているからであった。

瑤子は、K社に多くの卒業生がいる名門私立大学の英文科を出てすぐにK社へ就職した。そのときの配属先が営業四課で、仲村がその課長であった。その後、仲村が部長、役員、社長、そして会長と出世するに連れて、一時離れたことはあったが、ずっと秘書をしてきた。

無口で秘書能力に長けた瑤子は、万事そつなくこなし、他の役職者からの「瑤子コール」はたくさんあったが、仲村はその一つ一つをかわす交渉を人事部と巧みにしてきた。瑤子も仲村の下で働けることを幸せに思い、異動希望などは一度も提出したことがなかった。

異動希望は、上司の目に触れることなく、人事部へ直接提出できる、K社の適材適所政策の一環であった。

瑤子が仲村とただならぬ関係になったのは、仲村が部長時代に仲村の妻が交通事故で長期入院したときからであった。それまでに、瑤子が仲村を慕い、仲村が瑤子を可愛がる程度の私的関係は出来上がっていたが、瑤子は仲村の家庭を思い、仲村は瑤子の将来を配慮して、それ以上の進展は見せなかった。

仲村の妻が入院すると、その影響が仲村の身なりにすぐに出始めてきた。まず、靴である。毎日、同じ靴の時がある。雨の次の日には、汚れたままの靴であることもあった。靴の色とスーツの組み合わせがむちゃくちゃなときもある。ワイシャツやスーツが前日と同じこともしょっちゅうであった。モノが良くても、組み合わせや清潔感がよくなければ、台無しである。瑤子も秘書として、仲村にもう少しましな服装をして欲しかった。これでは会社の評判にも影を落とすと思われた。

瑤子は、業を煮やし会長にその意を伝えた。すると仲村は、決まり悪そうに瑤子に詫言、その・・・、ついでといつては申し訳ないが、しかも私用で恐縮なのだが、これでワイシャツを買ってきてもらっていいだろうか？」

と聞いた。瑤子は、サイズを聞きデパートへと走り、何枚か色やパターンを変えてそろえた。また、ネクタイも二十本ほど会長のロッカー室へ自宅から持ってきてもらった。以後、ワイシャツは朝、仲村が着てきたものがOKであれば良し、そうでなければワイシャツとネクタイの組み合わせは瑤子が「指示」し、会社で着替えてもらった。会社の近くのクリーニング店へは瑤子が出し入れした。

同じスーツは二日続けて着ないこと、靴はその日に着たスーツの色に合わせることに、靴とベルトの色は同系色とすることなどを、細かく、また甲斐甲斐しく仲村に依頼した。このときばかりは、上司と部下が反対になったようで、仲村としては「うん、わかった。わ

かった」と小声でうなづくしかなかった。

仲村には、育ち盛りの高校生の娘と中学生の息子がいたが、週に何回か近くに住む妻の妹がきてくれて、食事などの指示をしていくらしかったが、おおかたは娘が上手く切り回していてくれるようであった。また、家政婦を雇い、週一回の掃除を依頼しているようであった。

妻不在の影響は、食生活にも出ているようで、瑤子は仲村の顔色が冴えないのをドラ声と空元気の中に読み取っていた。会長室には冷蔵庫も電子レンジもあるので、昼食用に近所のスーパーで買い求めた野菜で多目のサラダを毎日作り、仲村が食事は客や社員と外食しても、会長室に戻れば、それを食べてもらった。

瑤子は、いまや仲村の身の回りのことを気遣い、あれこれしてやれるのは自分しかない、という妙な義務感と喜びの中にいた。

仲村は、子供たちのことも気にしているようであったが、以前よりずっと多く、瑤子を夕食に誘うようになった。

きょう、どうかね。時間取れるかな？」

仲村の誘いは、いつもきょうのきょうの話である。それは仲村の役職柄、秘書との夕食ごときに約束もあるまい、仕方のないことだと瑤子は思っている。しかし、きょうのきょう、は難しいことが多い。自分が仲村と一緒にに行きたくても、あと一時間くらいは欲しいときがある。しかし、恋人でもない仲村に、待ってくれ、とはいえない。

なんだ、それ、まだやってるのか、明日にしたらいじやないか」

率直で無遠慮な仲村の言葉が、瑤子の胸に刺さる。

秘書には秘書の、仕事の段取りというものがある。きょうしなくていけない仕事、明日でも良い仕事、その割り振りは、秘書に任せるべきである。上司はいくつも指示を出しておきながら、自分にとって一番大事なものし

か頭がない。それ以前の指示は臆である。いくつもあるジョブ・リストの中で優先リストが上司と秘書の間でずれることもある。上司は、自分の今の頭の中での最優先事項を、秘書に真っ先にしてもらいたい。それは組織としては当然のことである。しかし、指示が次から次へと出る中で、そんなことばかりしているのは、秘書の仕事はすべて中途半端になる。また、上司が秘書に下した昨日までの最優先事項ときょうの最優先事項の整合性はどうか、その辺りのことは、社内事情や秘書情報に速い秘書の進言に耳を貸して間違えることはない。せっかちな上司は、この点を自重すべきだ。

はい、でも、これは今日中にと．．．」

瑶子の両手の指はせわしくキーボードの上を叩き回っていた。

新聞でも読んで待っていらっしゃるか」

はいえ、とんでもございません。それではかえって仕事がかどりません」

瑶子は、このときばかりは失礼だと思つて、腰を上げて姿勢を正して返答した。

そうか。それじゃ、『おぞみ』へ行っているから、後から来なさい。遅くてもいいから。タクシーで来なさい」

仲村は、よく行く銀座のスナックの名前を残して、瑶子を後にした。瑶子は、仲村の後ろ姿を見て、きょうのシャツ、ネクタイ、スーツ、そして靴の色合いがびったり決まっているのに満足した。

瑶子の仕事は、意外に早く終わった。『おぞみ』のドアを開けると、仲村が、おう、こっちこっち、という感じにカウンターの端から片手を頭ほどの高さに挙げた。そばにいた女性が席を外そうとしたが、

あ、いいんだ、いいんだ。そんな仲じやない。前に何回か来てるだろ、うちの会社のコだよ」

と、それを制した。

でも、会社の方とこんな時間に．．．ですか？」

ま、いいじゃないか。なんでもない仲という関係だよ、ははは」

それを聞いた、ボックス席の中で接客中のママが、仲村に微笑を送ってきた。

仲村は、律儀にも、店を出されたちよつとしたフィンガー・フーズ以外に何も食べていないらしく、結構ご機嫌に酔っていた。瑶子は、何度も仲村と接客飲食をしたことがあるので、仲村がどれほど酔っているか、話し方やトイレへ行く回数でわかった。仲村がトイレに行った隙に、接客の女性にそつと聞いたら、トイレは一回目のことであつた。きょうは何も食べていないはずなので、

それじゃ、水割りで三々四杯？」

と聞いたら、四杯目を飲み終わるところだつた。

瑶子も、薄めの水割りを頼んだ。ボーイッシュな女性バーテンダーが、磨き上げてあつたグラスを冷蔵ケースから取り出した。光にかざして汚れやキズがないか、もう一度確認した。氷をアイスピックで器用に丸く削り上げ、手際よく薄めの水割りを作った。それを瑶子の前にすつと差し出した。一連の技が、マジシャンのようであつた。

瑶子が二杯目を終えようとした頃、仲村はかなりの上機嫌に出来上がっていた。これ以上飲んでも崩れることはないはずだが、何かお腹に入れてやらなくてはいけない。瑶子は、仲村への母心と、自分の腹具合も考えながらそう思った。

あのう．．．」

瑶子は、仲村の話の切りのいいところで口を入れた。

「．．．？．．． お、そうだね、そうだなうだ。腹減ったね」

仲村は、瑶子の意を察してそういった。瑶子は、仲村のこんなところが気に入っていた。酔っていても、自己中心の田舎者にならない

点、部下や他人への配慮がいつも途切れないこと、そこが仲村を今日まで押し上げたのだ、と瑠子は思っていた。

十二

スナックを出た二人は、タクシーで新宿まで出て、仲村が行きつけの鮭屋へ立ち寄った。ここへも何度か連れてきて貰ったことがあった。鮭には清酒が合う、といって仲村は地方の地酒を頼んだ。瑠子も同じようにしてもらった。鮭もお酒も、瑠子には美味しかった。仲村は板前と、何とかという魚の習性の話をしていたが、瑠子には初めて聞く話であり、仲村の相変わらずの博学に感心していた。魚に詳しい、さすがの板前も感心していた。

新宿からは、タクシーで瑠子のアパートがある花小金井まで行き、そこで瑠子を落としたタクシーで仲村が小平の自宅まで帰る、というのがいつものコースであった。逆に、酔いすぎた仲村がわがままを言って、先に仲村宅へ着かせ、その後、Ｕターンして瑠子のアパートへ向かうときもなにもなかった。そういう時は、仲村は翌朝、思い出せないの、瑠子を部屋へ呼び、帰宅ルートを確認したりした。そして、身体を小さくして瑠子に詫びるのが常だった。瑠子は表情には出さなかったが、それが可愛くて、給湯室などでクスッと一人笑いしてしまった。

きょうの仲村は、それほど酔っていないそうは無かった。しかし、タクシーが瑠子のアパートの近くに着いたとき、瑠子が、
「お茶でも飲んでいかれますか？」
と、声を掛けると、どうしたわけか、

「うん、そうさせて貰うか」

と返答し、さっさと金額を払って下車してしまった。

瑠子が、そのように声を掛けることは、言

うなれば社交辞令であり、そういわないのも艶も趣も感じられないと瑠子は思うので、毎回、そう声をかけていたのだ。もちろん、見ず知らずや初対面の男にそんな声は掛けない。第一、同じクルマに二人だけで乗る羽目になることを賢く避けるだろう。

また、男にしても、女性の一人住まいの部屋に、そういわれたからといってのこのこ這いあがるのは田舎者である。そんなことは十分弁えている仲村だからこそ、いままで何回その言葉を聞いても、一度たりとも瑠子の部屋に入ったことは無かった。ところが今宵は、仲村があっさりと瑠子の申し出を受けてしまったのだ。

瑠子は慌てた。それは、毎日渡っていた決して壊れることが無いと思っていた吊り橋が、きょうは突然、ずるずると切れかかったようなものだ。

掃除はしてあったか。下着は部屋干しのままになっていなかったか。キッチン周りは片付いていたか。幸いなことに、致命的ともなりかねない掃除は、いつもは週末にするのだが、昨夜、きょうのことを虫が知らせたかのように、ひと通り済ませてあったので一安心であった。キッチンもトイレもきれいな筈であった。瑠子は、仲村を自分の部屋まで案内する短い時間内に、仲村との他の会話とパラレルでそれらを頭に浮かべてチェックしてみた。

部屋へ着いた瑠子は、玄関に仲村を待たせたまま素早く、リビングの窓とキッチンの窓を開け、ファンを回し換気体制に入った。そして、仲村を部屋へ招き入れた。仲村の上着をハンガーに掛けた。仲村をキッチンの椅子のひとつに掛けさせた。冷えた水でオシボリを作った。

「何を召し上がりますか？」

瑠子は、返ってくる答えを想定しながらそう聞いた。

「温目のお茶が欲しい」

やっぱりそうか。瑠子の勘は当たった。

瑠子は、熱いお茶を二、三回氷に通してから湯のみ茶碗に入れ、茶托に添えて仲村に差し出した。オシボリで顔と手を拭き終わった仲村が、上手そうにそれを口に含んだ。

「広い部屋だね・・・」

狭いでしょ。一人ですから・・・」

多少広いとはいえワンルームマンションだし、所帯持ちの住宅に比べれば狭さは免れない。それに、ベッドが丸見えなのが、少し恥ずかしかった。幸いに、仲村はベッドの方には背を向けた椅子に座っている。その部屋には男は父親とて、まだ入っていないかった。

とりとめも無い話を十五分もした頃だろうか、仲村が、

「きょうは、急に邪魔して悪かったね。じゃ、帰るから」

と、仲村が唐突に言った。瑠子も、
「そうですか。夜分ですからお引止めも出来ませんで恐縮です。それでは、いま、お上着をお持ちします」

そういつて瑠子は席を立ち、仲村の上着を持ってきて仲村の後ろに回ろうとした時だった。瑠子の左腕を左手で掴んだ仲村は、瑠子の背中に回り、後ろから瑠子を優しく抱きしめた。自分の頬を瑠子の首に絡めた。両腕を掴んでいた仲村の手は瑠子の胸に回り、瑠子が胸に抱いていた仲村のジャケットが床に落ちた。大きな掌が瑠子の両の乳房を優しく包んだ。

瑠子は、そこまでの一連の動作にあっけにとられていた。あれよ、あれよ、と言う間の出来事だった。瑠子の胸が高鳴った。その鼓動は、掴んでいる仲村にもはっきりと伝わっているに違いなかった。

仲村が、瑠子の顎を下から優しく押し上げ、上を向かせた。そこに仲村の大きな顔があった。逆さまに映っているので他人の顔のようでもあった。仲村の唇が静かに下りてきて、

瑠子の唇を優しく覆った。瑠子は、そのままにしていた。静かな口付けだった。息苦しくなった頃、仲村が唇を開放してくれた。唇を少し離れた位置で、二人は、途絶えた息をお互いに吸ったりはいたりしていた。

仲村が、瑠子の位置を自分の方に向けた。優しく抱きしめた。瑠子は両腕をだらりとたらしたままだった。瑠子は、人形のように仲村に顔を仰向けにされると、そのように静かにした。仲村が、再び、瑠子の唇を吸った。瑠子は次第に振り返った。仲村が瑠子の腰に手をやり支える。瑠子のフレア・スカートの間に仲村の太い片足が入り、それが瑠子の股間に当たり、瑠子はそれ以上振り返らなくても済んでいた。

瑠子には、抗う気持ちはまったく起こらなかった。仕事では、厳しかったり、気変わりなどころもあるが、基本的な人間的なところで仲村を十分信頼しきっていたからだ。しかし、突然、このような事態に立ち至り、瑠子としてはどのようなようにしてよいかわからなかった。それが不安といえば不安であった。

唇をふさがれ、仲村の舌に呼び出されたり、胸を揉まれていくうちに、瑠子は自分の滴が熱く滲んでいくのを感じていた。仲村は瑠子をベッドへと運んだ。

仲村が瑠子の衣服を剥ぎに掛かった。

部長、それだけは・・・、奥様がいらっしやいます・・・」

瑠子は、仲村の手首を押さえながら、抗った。しかし、力づくでは所詮勝ち目はない。瑠子は、観念するほかはなかった。そのときまでは、瑠子は仲村とはどうなつてもいいが、家庭ある男の家庭に影響が出るようなことは出来れば避けたかった。

「ごめん、君には迷惑は掛けない。それに、君が言った事は、君には関係ないことなんだよ。僕と彼女との問題だから・・・。君がそこまで考えることはない」

でも・・・」

そういう間にも、仲村の手はコンピュータ制御のマジック・ハンドのように瑤子の着ているものを次々に剥いでいった。その手さばきには瑤子に有無を言わせないものがあつた。茫然自失の態の中で瑤子は、それだけは・・・と、仲村に懇願した。

「済みません。シャワーを・・・」

「はいよ、そんなこと」

そんな無体なことをおっしゃらないで。私を辱めないでください」

仲村はようよう瑤子を開放した。瑤子は、よろけるようにして浴室へ消えた。

仲村はその晩、瑤子に対して荒々しくも優しかった。瑤子は、台風で翻弄され、引きちぎられ白い砂浜に打ち上げられた昆布のように、しわくちやになつた純白なシーツのうえで微動だにしなかつた。自分の腕を枕にうつむいて、髪は頭の前方へも、肩の方へも投げ出されて乱れている。一枚だけ着残されたキヤミソールは腰までめぐりあがつて、裾のシンプルなレースとともに艶様な襷を作っている。無防備に突き出された両方のヒップは、ふてぶてしく盛り上がり、つま先はハの字に閉じられていた。

十三

こうして始まつた瑤子と仲村の関係は、仲村の妻が退院してからも続いた。催しごとや、会議の補佐、その他の業務で仲村と瑤子が夫婦以上に呼吸の合ったところをK社の社員は何回となく目にしていた。そのたびごとに、口うるさい連中は二人の艶聞をささやいたが、結局それは艶聞に終わり、確たる証拠は誰もつかめなかつた。それは、仲村が瑤子のことを思つて、かなりの気を使つていたからである。

たとえば、仲村が役員になつてから、行き

がかり上、役員車を使って二人で自宅へ帰るときも、瑤子を花小金井で下し、自分は自宅近辺で社用車を降り、そこからタクシーで瑤子のアパートへ戻るといふ方法をとつた。また、二人のデートに社用車を使うことは絶対にしなかつた。外食をするときも社を別々に出て、レストランや鮎屋で直接待ち合わせた。そのレストランや鮎屋は瑤子に雑誌などで適宜選ばせ、社員や得意先が使うようなところは避けた。

瑤子は、仲村に公私共に尽くし、それが幸せだった。加齢に従い、これ以上の幸福は来ることはなからうと思うようになってきた。その間に、誤つて一度、仲村の子供を身ごもつた。三六歳の時だった。

二人の間では、子供を作らないことにしていたが、誤つたとしても、仲村の子供が自分のお腹のなかで生きていることを知つたとき、瑤子は感激した。ひとりでお腹をさすりながら、一人ででもいいから、この子を生んで育てたい、と強く思った。理由はなかつた。自分は女だと思つた。

遠慮がちにも、仲村に出産と、これを機会の結婚を主張した。しかし、仲村は、結局、瑤子を納得させ諦めさせた。

その時の、瑤子のショックは大きく、正妻でない立場が悔しかつた。仲村の家庭を壊したくない、なんていう少女的な思いもガラス細工のように微塵に砕け散つた。仲村が、どんな方便を使おうと、絶対的に向こう岸の間だということもはっきりした。瑤子は、自分が一人きりだということ初めて知つた。生きていても仕方がないと思つた。

瑤子は辞表を出して、翌日から出社しなかつた。自宅の電話にも出なかつた。まだ、携帯電話がない頃のことだった。日の高いうちに仲村が飛ぶようにして来宅した。瑤子は応対に出なかつた。翌日は、たぶん出社前だったろう、午前中にきた。訪問チャイムの電池

は抜いておいたが、仲村はドアを叩いて開扉を迫った。瑤子は、近隣の「耳」があるから遠慮するよう小声でドア越しに対応した。仲村は瑤子の体面を考えて、その日は去った。

三日目の夜だった。ドア・ノックがあった。メモを入れるから読んでくれ、街灯の下で待っている」

という仲村の小さな声が、ドア・ポストの間から、神経を集中していた瑤子の耳に入った。ドア・ポストから手帳の切れ端のような紙片が落ちた。瑤子は拾って読むべきか否か、しばらくの間迷った。

気持ちはわかる。大変申し訳ない。会って話を聞いて欲しい。それでも退社するなら引き止めない。できるだけだけの事はする。その部屋の光が消えたら、それを合図に部屋へ行く。それまでその部屋から見える街灯の下に「いる」

メモにはそう走り書きしてあった。長い間、読みつづけてきた絶対に読み違うことのない仲村の筆跡であった。瑤子は、その筆跡を指で偲んだ。二階のこの窓のカーテンとサッシを開ければ、ずっと向こうの街灯の下に仲村の姿が光に浮かんでいるはずだった。そのカーテンは、いつか、寒くなるからといって、仲村と二人で探した懐かしいものだった。立ち上がり、カーテンを掴む瑤子の頬を大粒の涙が流れ落ちた。ここで窓を開けて彼を見たら、また、もとの木阿弥だ。瑤子は、歯を食いしばって開けるのを躊躇った。

とうとう、降り始めたか。仲村は、鈍色の空を見上げた。空のどこにこんなに溜まっていたのかと思うように、後から後から降ってくる。ずっと見上げていると、空へ吸い上げられて行くようだった。

仲村は、瑤子が自分の提案を受け入れてくれるか否か、気が気ではなかった。

瑤子が妊娠したことを自分に告げたとき、来るべきものが来た、と思った。どんなに気

を付けても何かの拍子に、妊娠することはあり得る。その時、瑤子が何を言ってくるか想定できないではなかった。

この度も、瑤子と家庭を天秤にかけて、家庭を取ったわけではなかった。自分の子供たちが、せめて就職するまでは、形だけでも両親がいるということにしたかった。差別は無いとはいわれるが、子供たちの将来に何かの不具合が生じたとき、それが「離婚家庭」が原因になることは、どうしても避けたかった。ということとは、結局、家庭を取ったことにならないか。それが男の狡さなのか。仲村の考えは堂々巡りした。

仲村は、そろそろ、冬の寒気が応える年齢に差し掛かっていた。雪が舞うこんな寒さの中、屋外に長くいれば風邪を引くのは目に見えている。もう、気持ちだけで頑張り通せる年齢は、遠ざかりつつあった。雪でぼんやりとしている瑤子の部屋の窓を見つめていた。

そうだ。見るだけ見てみよう。少し開けるだけなら、向こうからは気がつかないかもしれない。女の知恵はいつになっても可愛い。瑤子は、意を決して窓をほんの少し開けてみる。寒気がすっと入ってきたが、北風の寒気ではない。

あら、雪だわ。空気が動かないような寒さの中で、いつの間にか静かに雪が舞い落ちてきていた。あたりは夜目にもわかるほどどうすらと雪化粧されている。ずうっと向こうの街灯のあたりは、雪で霞んでしまっているが、確かに街灯の下には人影らしきものが立っている。それが仲村であることは確かだ。この寒い雪の夜に仲村は、傘一本さすこともなく佇んでいる。

瑤子は、すぐにでも飛んでいって傘を差し出したかった。仲村は雨に濡れることを極端に嫌った。雨に歩けば」というアメリカンポップスを二人で聞いているとき、雨を喜ぶ奴

の気が知れない、あれは泥水だ、と言っていたのを思い出す。その理屈は理にならなかった。雪だつて同じだろう。しかも、きょうは寒い。

瑤子は、心が揺らいだ。カーテンを握る手に力が入った。涙が止まらなかった。これまでの仲村とのさまざまな思い出が、走馬灯のように次から次へと浮かんでは消えた。瑤子の楽しい時にも、悲しいときにも、いつも仲村は瑤子を大事にかばうように、慈しみながら、話を聞いてくれた。

何回も迎えたこの部屋でのクリスマス、二人の誕生日、お正月、そして瑤子のか弱くしどけない姿態と仲村のたくましい肉体を、おそらく何百回もじっと見つめてきたこの部屋の天井。思い出というには余りにも中身の濃い毎日であった。そんな所そこいらの正規の夫婦よりは、はるかに充実した愛の缶詰のような長い年月であった。

それをたった一度の赤ちゃんのことで、意見が分かれ、仲村を信じられなくなってしまった。瑤子は、仲村の子供が欲しかった。自分が世界で一番愛している仲村の子供が欲しかった。二人で避妊には気を使っていたが、本当は子供が欲しかったのだ。妊娠は偶然であった。しかし、認知も結婚も諦めると、最愛の仲村からいわれて、瑤子は生きる指針をなくした。

瑤子は、自分が本当に仲村を忘れられるなら、窓を開けても大丈夫だと思っていた。しかし、しんしんと降る雪の中に立っている仲村を、自分の部屋から見ていると、そんな気丈夫さは空気が抜けていく風船のようにしぼんでしまうのだった。

瑤子は、思い切るようにカーテンから離れ、部屋中の明かりを消し、玄関のドアのところへ行って開錠すると、暗いその場へ、へなへなどしやがみ込んでしまった。

程なく階段を駆け上がってくる足音が聞こえた。ドア・ノブが遠慮がちに回された。ド

アが静かに開いた。冷たい空気と一緒に仲村が音も無く入ってきた。仲村は暗い部屋に目を凝らしている。後ろ手にドアを閉めた仲村は、足元に瑤子がうずくまっているのに気がついてはっと、息を呑んだ。

瑤ちゃん、ごめん」

仲村は、両の手で瑤子を掬い上げた。

仲村さん」

仲村は、瑤子をひしと抱きしめた。瑤子は、仲村の胸にすがって号泣した。

仲村の頬を、雪の解けた冷たい滴が流れる。瑤子の頬を熱い涙が流れる。二人の顔はぐしょぐしょになった。

このような苦節を重ねる中で、瑤子と仲村の心の絆は、並みの夫婦より遥かに固いものへとなっていた。

十四

由美子と仲村との新たな関係を、瑤子は仲村からは聞かされてはいないが、仲村のちょっとした仕草ですぐに気がついた。そのことに仲村も由美子も気がついてはいない。瑤子は、女性の加齢もあって、最近では仲村と肌を合わせるようなことはめっきり少なくなつたが、だからといって仲村との仲が薄くなつたわけでもないし、夜離（よが）れが淋しくて身が疼くような事もなかった。

仲村との淡々たる信頼関係が続いていた。最近、休日に仲村が自宅に遊びにくるといので、五目寿司などを作ってみた。ワインも、瑤子がスーパで物色してきた千円ちよつとのチリ産のワインで、仲村もこのくらいのワインが飲むときに気が張らなくていいと喜びである。

窓越しに雪柳を見ながら食器洗いをしていくと、久しぶりに仲村が臀などに触ったりしてくる。瑤子も臆せず仲村のものを拭いた手

で探してみると、結構元気な様子だ。食器洗いが終わると瑠子は顔の化粧品を落としてベッドへと向かった。長年連れ添った夫婦のごとく、すべてがマニュアル通りのように、仲村はすでに瑠子のベッドにかけてに裸で横たわっているし、瑠子は、何千回言われたかもしれないがそれに反して、最後の一枚を身に付けてベッドへそっと滑り込むのであった。こうして、午後のひと時を所在無く、二人で裸でベッドで過ごすのが、瑠子にとっても仲村にとっても極上の安らぎであった。交わることもあれば、そうしないで乳房やスティックをお互いに手で慈しみあうだけで終わることもあった。

きょうは、何か仲村が積極的であった。

どうしたんですか？ 何かあったんですか？

瑠子は由美子のこと起因しているのではないかと思いついても、それに角を立てることもなく、そっと探ってみる。

いや、いや、なんでもない。ちょっと無沙汰して申し訳ないから、と思ったもんだから・・・」

それはそうですね。この前はいつでしたっけ。あら、あんなに前よ、ほら」

瑠子はベッド脇の年間カレンダーを見ていった。さすがにハートマークはついていないが、それらしき赤丸が飛び飛びに着いている。

おい、止めてくれよ。何か管理表みたいじゃない・・・」

まさにそれは、そのための瑠子の管理記録表でもあり、無言の催促表でもあった。もっと若いときは生理開始予定日に赤丸があり、その直前一週間くらいが安全日だと仲村は教えられた。それはそれでまた、無言の催促表でもあった。会社の秘書として優秀さが、こういうところでは裏目に出るのか、仲村はそう思っ苦笑したものだ。

ねえ、きょうはどうしてそんなに優しいの」

瑠子は、久しぶりの悦楽感に身を委ねながらそういった。昔のように、間があくと身体が辛いようなことはなくなって、仲村から身体に触れてこなければ、それはそれで楽しい話が出るだけでも、とても嬉しかった。しかし、機会あつてきょうのように優しくされ、時間をかけて身も心も揉み拉かれると、昔のように歓喜と高ぶりの情感がひたひたと押し寄せてくる。瑠子は久しぶりに自分がジワッと潤んで来るのを自覚し、先を急ぐ仲村の手を腿で挟む。いくつになっても、こころ弾むものだ。仲村の乳首を甘噛みしてあげる。瑠子は、仲村の手に身を委ねていた。仲村に言わせれば「年甲斐もなく大きな声」を出し、白い身を反らすという。

妊娠の心配がなくなった瑠子は、ことが終わると、

また、栄養いただいたちゃった。肌、きれいになるわね。ありがとうございます」とおどけていった。そして、横になったまま、いつまでも膝を合わせていた。仲村は、そんな瑠子を見て、昔なら可愛いと思ったものだが、最近では、共によく戦ってきた我が戦友よ、と思えるようになってきた。

ねえ、あなた、この栄養、他のところでお裾分けしてないわよね」

ええっ、してないよ。してない、ない」

その早口なところが怪しいな、こら、白状しなさい！」

瑠子は、仲村の柔らかくなったものを思いつきり捻った。

ぎゃー、痛え！ してない、してない」

ま、私より大きい声出るじゃない。ほんとじゃ許そう。ごめんなさいね」

瑠子は別に、仲村を責めるつもりは毛頭なかった。男なんかいつまでも子供なんだから、びちびちして湿潤な娘と仲良くしたいものなんだわ、と思っていた。瑠子は、もうそんな娘と張り合う気力もなかった。仲村

は、若干好色気味で、そのためか、同世代の男性より、若く見える。しかし、根底から、もう自分以外の女へなびくことはない、瑠子はそう確信していた。

由美子さんだって、悪い娘ではないし、仲村が一時的に遊んでいる分にはこれ以上の良い娘はいなかった。しかし、自分の身体がそれほど男を必要としなくなったとはいえ、仲村のものが由美子さんに唾えられたりするのを想像すると、一抹の嫉妬を感じないわけはなかった。でも、由美子さんも若い男性とお付き合いしているようだし、そんなことを考え合わすと、仲村がすこし可愛そうでもあった。

ころあいを見て仲村が、
もういいだろう」

とテイッシュュペーパーを瑠子の股間へ持っていった。自分のものが瑠子の出口まで戻ってきていた。それをきれいにやってやった。その後を仲村が優しく唇でぬぐってやった。瑠子の腰は、名残り惜しげに仲村の唇を追った。瑠子は腿で仲村の顔を優しく挟んだりした。瑠子も、のろのろと起き上がって、仲村に「お返し」をしてやった。そして、お互いに素肌で抱き合って微睡むのだった。それが長年の二人の習慣であった。

十五

西新宿にある日ホテルへ、由美子は駅西口からシャトルバスに乗っていった。一応、ひと目を気にしながら由美子は、仲村が指定した部屋へと急いだ。仲村が静かな笑顔でドアを開けてくれた。

お、来たか。待っていたよ」

仲村は、上着とネクタイを外した状態で由美子を迎えた。

お久しぶりです。お変わりございませんか？」

由美子は、乱れた髪を耳にかけながら微笑

みかけた。

うん、私は大丈夫だ。すこし痩せたかな？」
仲村は、由美子のバッグや紙袋を持ってやった。

えっ、そう見えます？ 嬉しい。最近、食べ過ぎ、運動不足で少し太ってしまったんです。それで、このところダイエットに励んでいたんですよ」

そうだったの。じゃ、私もきょうは協力させてもらわなくっちゃね」

はい？」

だから、その・・・」

「・・・まあ、いやらしい。なにをお考えかと思ったら・・・いけない人ね」

言い終わらない内に、由美子は仲村に抱きすくめられた。仲村は、片手で由美子のバッグをベッドの上に投げ、由美子の唇を求めた。唇のふちを仲村の舌でなぞられている内に、由美子はもっと早く唇を吸って欲しいと、背伸びして仲村の唇に自分の唇を押し付けた。仲村の大きな手が由美子の胸を優しく驚掴みして揉んでいる。もうひとつの手は、由美子の臀に這わせ、スカートの上から下着の線をなぞっていた。

仲村の舌との久しぶりの戯れに、由美子は蕩けそうだった。自分の滲みが花芯のあたりにジワッと湧くのがわかる。仲村の唾液の香りの中で、由美子は膝の力が抜けそうで、仲村にしがみついていた。

シャワーしようか？」

そういつて仲村は由美子を開放した。仲村は、年のせいもあるかもしれないが、セックスそのものもさることながら、その前のシャワーとか、終わった後の戯れをより好んだ。緩やかな仲村式イベントに、何一つ戸惑うことなくエスコートされていくのが、由美子には心地よかった。

仲村は、バスルームへ入ると、湯船に湯をためながら、シャワーで由美子に湯をかけ、

たっぷりの泡で由美子を洗ってあげるのが常だった。首筋から脇の下、乳房の下側から乳首、向き合った状態で、仲村は由美子の隅々までを丹念に愛撫していった。

仲村は、由美子を片膝立ちにさせて、秘所に優しく指を這わせる。花びら一枚一枚を時間にかけて慈しみ、後ろの窪みにも指を訪れさせた。

「やん」

そういつて由美子は腰を浮かせたりした。

由美子は、仲村の肩に両手を置いて、その快楽に耐えた。声が知らず知らずに漏れる。仲村の指には、石鹸の泡とは違った熱いぬめりがまとわりついてくる。そのぬめりを纏った指が、由美子をさらに狂喜へと押し上げるように狼藉を働いた。

「はあああ」

由美子は、大きなため息をついた。

それを機に、由美子は、仲村を椅子に座らせ、自らの秘所のぬめりを手にいっぱいにとると、仲村のスティックに絡めた。嵩が増えてもまだ柔らかい中村のものは、由美子が両手で挟んで前後させる内に次第に立派になってきた。由美子は、ときどき仲村の目を見て、
（これでいい？）

というように、無言で小首をかしげ、口元を少し微笑ませる。

仲村は、そんな由美子の仕草が可愛くてたまらなかつた。由美子の薔薇は、ずっと潤み続けているようで、ときどき自分のぬめりを手にとっては仲村のものへと絡めた。湯船に湯が溢れてきた。

由美子がシャワーで仲村の身体についた石鹸を流し、ついで自分をも流した。仲村が、先に湯船に横になり、後から由美子が入る。

仲村は由美子に片脚を上げさせたまま由美子の薔薇を愛でる。由美子が手で隠そうとするのを許さない。仲村は、薔薇へ口をつけた。

由美子は両手で仲村の髪を掴んだ。仲村の舌の狼藉に伴い、由美子は嬌声を漏らす。そし

て、髪を掴んだ仲村の頭を引いた。

湯船の中で、由美子は顔は濡らさないで、オットセイのようにグルリ、グルリと回転する。湯浴みを心から楽しんでいるようだ。仲村は腕を出して、回転する由美子の胸に触れた。掌を乳房と乳首がなぞるように過ぎていく。

回転を止めては、仲村の首にしがみついてくる。沈み込んでくる由美子の腹部に仲村のものが触れる。由美子が器用にそれを両腿で挟む。由美子の秘所の潤みが、仲村を包む。

由美子は仲村を思い切り両腿で締め付ける。

「うん、気持ちいい」

仲村が呻いた。

こうして二人は、バスルームで小一時間も過ごした。由美子は、バスタオルで仲村を拭いてやった。

「ねえ、頭低くして、・・・そうそう」

仲村が大きいので、頭を下げないと由美子は仲村の頭を拭いてやれない。

「万歳して、・・・そうそう」

由美子は、仲村の脇の下を拭いてやる。まるで母親が子供の風呂上りを面倒見ているようである。仲村は、そうして身体を他の女性に任せきりにしているのが好きだった。理髪店でもそうだし、サウナのスポーツマッサージでもそうだった。もちろん、由美子にそうしてもらうのがベストであった。

由美子は、しゃがんで仲村の柔らかくなっているスティックを摘み上げ、上へ、左右へと振り分け、細かい陰の部分の水滴を押さえた。

「はいですか？」

由美子は上目使いに仲村を見て、そう言い、返事も待たずに仲村を口に含んだ。

「おっ」

由美子は、タオルを落とし、両手で仲村を愛しんだ。仲村は無様に佇んで、由美子の肩に手をおき、由美子の愛撫に身体を任せてい

た。

後で、またね」

由美子は、幼稚園児に言うような調子でそういう言い、仲村をタオルで拭いた。

仲村に促されて、ベッドに上がろうとしたとき、由美子は自分の秘所から蜜が内腿をつつ、と流れるのを感じた。胸にまいたバスタオルで拭きとってしまおうかとも思ったが、それがなぜか不自然なことのような気がして、そうしなかった。恥ずかしいとも思ったが、それよりも仲村といるときは自然がなせるままに、そのままの素直な気持ちや、自然の身体の状態を仲村に見て欲しかった。

仲村に嫌われないような配慮は最低限するとしても、わざわざ媚びるような態度はとりたくない、また、わざわざ取り澄ましたようなこともしまい、そう思っていた。仲村には、そういう由美子の自然な振る舞いを受け入れてくれそうな気がしていた。

他の女の人は、これまでに仲村とベッドを共にしたとき、どのように振舞ったのだろうか、一瞬、そんなことが頭を過ぎったが、そんなことを詮索してみても意味のないことだと思っただ。

由美子は、自分が濡れるだけ濡れて、大きな声が出て、仲村をきつく両腿で挟んだり、あるいは自分がシートをちぎらんばかりに掴み、逆えびに反りきるようになって、何も隠すまいと思った。仲村には、由美子をその気にさせるものがあった。仲村と肌を合わせる回を重ねるたびに、由美子は上ってはいけない白いきれいな階段をひとつずつ登って行く自分を感じていた。

仲村と知り合う前は、男と女の交わりがこんなに奥深いものとは、まったく知らなかった。仲村の優しいリードで、自分がますます奔放になっていくのがよくわかる。松島との時には、二人でともに駆け上がるような感じ

だが、仲村との時には、落ち着いた仲村の手の上で自分ひとりが狂喜して身悶え、最後に仲村も伴走する、と言う感じだ。それは、仲村が自分の身体への負担を配慮してのことであると思われた。だからといって、由美子には何の不満も無く、完膚無きまでに打ちのめされたような快楽に酔えるのだった。

最後には、自分はどこまで上り詰め、何をみてるのだろうか。よその夫婦もこんなことをしているのだろうか。由美子は自分がふしだらな女なのではないかとさえ思うことがある。

今夜も、何回も絶頂を叫んだ後、仲村の腕に抱かれて由美子は、そう、仲村に聞いてみた。

なぜ、そう思うのかな」

だって、こういうことって、いままで、小説で読んだりして一応は知っているつもりなんです、何か私って、そういう人たちよりぜんぜん、なんていうか、淫らだと思っんです。私、夢中になっていても、あっ、いま大きい声が出たな、とか、いま、物凄い恥ずかしい格好を仲村さんに見られているな、とかわかるんです。そして、もっともって身体が興奮してしまうんです。・・・それに、終わって仲村さんの腕の中に優しく抱かれていると、また、して欲しいと思うんです。あ、恥ずかしい、こんなこと言ってしまうなんて・・・。それに、お洋服を着ているときでも、仲村さんとのことを想い出すと、自分がジワッとしてくるのがわかるんです。ねえ、私って異常でしょ。いけない小説に出てくるような女でしょ」

それは、別にふしだらでも異常でもないよ。セックスって二人の本能的な欲望が絡み合うものなんだよ。自分が、というか自分の身体がなすままにしていればいいことで、他の人に迷惑をかけなければ、何をしようとかまわない。愛するもの同士が、相手がしてやいた

いことをしてやり、自分にして欲しいことを相手にしてやる、それでいいんじゃないの。別に外部に公表するわけではないし。私が思うに、平均的なセックス・スタイルなんて、無いと思う。それぞれのペアが、独自の方法ですればいいのではないかね。それが秘密っていうものだよ」

秘密ねえ」

由美子は、なるほど、と思った。秘密という言葉を、こんなに実感として感じたことは無かった。

君は、もっとずっと、この面で成長できるよ。まだまだ、私に遠慮しているしね。私は、君の口から今夜抱いて欲しい、というような電話が来るようになるようなことを待っているんだよ」

でも、いつもお忙しそうだし、そんなことは私からいえないわ。会長にお声をかけていただくだけでも、とても嬉しいのに」

仲村は、裸の由美子を掻き寄せた。そんな初々しい由美子が可愛かった。

十六

かつて瑤子が女盛りだった頃、よく求められたことを思い出した。

すみません。今夜、いいですか。遅くてもいいです。お待ちしてます」

と、言うようなことを口速に言うのだった。会長室で、いつ人が入ってきてもいいような位置関係で、小さな声で言われるときもあったし、外出先から社に直通電話を入れたときに、最後に、そうねだられるときもあった。

現在ののように、携帯電話が無い頃なので、偲びあいの意思伝達にはそれなりに配慮が必要で趣があった。その「おねだり」は、瑤子が秘書だから、仲村に夜の会食などが無いときに限られた。仲村は、そうした「おねだり」が嫌ではなかった。むしろ、楽しみにしてお

り、少し間があいて、二人の身体がちょうど求め合う頃、瑤子が声をかけてきた。

いま、由美子が昔の瑤子のように、自分の身体が疼く度に仲村の携帯電話を鳴らしてきたら、仲村は昔のように身体がいうことを聞かないかもしれないが、由美子がそうすることとは、それだけ深く仲村を信頼してくれたことになる。仲村は、由美子から全幅の信頼を得たかったし、由美子を、それこそ目に入れても痛くないほど可愛がりたがった。

仲村はふと、この間、瑤子のアパートで、瑤子が仲村と由美子との間に気がついていて、ような素振りを見せたことを思い出した。瑤子は、しっかり者だし、第一、昔から勘が良かった。仲村の携帯電話の着信記録を無断でチェックするようにはしたなさは無いが、あの日以来、仲村は由美子とお互いに着信記録はすぐに消去するように示し合わせた。

「今まで、いつも私の方から連絡をしてきた。それはいっこうに構わない。これからも私は君に会いたいときは自分から連絡する、いいだろ。だから、君からも連絡を欲しい、もし、嫌でなければね」

嫌だなんて、とんでもありません。これからは連絡させていただきます」

由美子は、すこし元気の無い声で言った。

「いやいや、何もそんなにしよげんことは無いよ。ごめんごめん、ちっとも責めていないからね。ほら、顔を上げてごらん」

仲村は、由美子の唇をそっとふさいだ。由美子の唇がこれに元気に応じた。

十七

由美子は、仲村と会うときは必ずといっていいほど、肌を合わせた。由美子の身体は仲村によって、回を重ねるごとに開発されていた。由美子は、いまでは間をおかないで男

性に抱かれたいではない、良きにつけ悪きにつけ、仲村のせいだといえた。由美子は仲村に、由美子から電話を欲しいといわれたが、なかなか自分から会いたいとはいえなかった。それは仲村が、企業の会長という重職にあることによる恐れ多さがひとつ、もうひとつは自分の身体が仲村を欲しているときでも、父親よりも年長の仲村にはどうしても恥ずかしくて言い出せないでいた。

そんな折に、松島から今夜急に会いたい、などと携帯メールを貰うと、悶々としてしまうのであった。いそいそと出かけていって、自分の所作や表情に、いかにも今夜抱いてください、なんていう雰囲気が出やしないか、それが気になって、時間があっても素直に応じることが出来なかった。承諾のメールを打ち返すまでに時間が掛かった。

松島と居酒屋で会っていると、とても楽しかった。スポーツの話が多かったが、それまで、興味の無かったラグビーのルールも松島の説明では意外と簡単だったし、得点計算も覚えてしまえば難は無かった。青山の秩父宮ラグビー場へも、二人で何回か足を運んだ。神宮球場へも行った。松島は元応援団長だけあって、そうした競技場では「顔」であった。応援団の後輩や競技場係員も礼儀正しく松島に挨拶をした。そんなときの松島は、ちょっとした渋面を作って礼を返すが、由美子にはそれがおかしくて、心の中で思わず笑ってしまった。

二回目のデートで初めて肌を合わせた直後には、多少は気まずさがあったが、松島がもともと明るい正確なので、昼間のデートを重ねるうちに、そんな重苦しさは霧消してしまっ

た。しかし、居酒屋などを出て、まだ時間がある時、松島に

すいません。きょう、いいですか」などと小声で聞いてこられると、戸惑ってしま

う。そんなところが、松島のまっすぐなところなのだ。松島と、とはいえ、まだ性欲をストレートに表現できる間柄ではない。そんなことを聞かないで欲しい、と由美子は思った。こちらが、たとえその気があっても、

はい、どうぞ」
とはいえないのが女心というものだ。由美子は松島の向こう脛を、思いっきり蹴飛ばしてやりたかった。でも、そんな松島の実直さに、由美子はほのぼのとしたものを感じていた。

松島とホテルの部屋に入ると、由美子は自分が別の自分になったように思える。仲村といるときは仲村が一番好きだと思っているが、松島と一緒にいるときは、松島には他の男が持ち合わせない味わいを覚えるのだった。

由美子は、仲村には申し訳ないような気もするし、そんな自分がセックスにふしだらな女のようにも思えるのだった。しかし、仲村とも松島とも性愛を抜きにしてもしっかりとした相愛の絆で結ばれている自信があった。

松島と二人になると、由美子の身体は首輪を解き放たれた子犬のように、奔放になった。松島の首に腕を絡めてキスをし、ベッドに押し倒して松島のシャツを剥いでいった。片方の乳首に指を絡ませ、もう片方の乳首を優しく噛んだ。

松島は、先制パンチを受けたボクサーのように、緒戦では防戦を強いられる形だが、やおら体勢を入れ替え攻撃にでる。由美子の上に馬乗りになり、由美子の動きを制御すると胸を優しく揉んで唇を奪った。

「うん」

これで由美子は、神経を抜かれたザリガニのようにくたっとし、白いあぎとを宙に舞わせる。松島は、由美子の着衣を一枚一枚大事

に剥いでいく。白いレース刺繍の下着が松島の目に染み、松島を奮い立たせる。

松島の愛し方には、メリハリとテンポがあった。愛撫されるところが一定の時間を置いて次から次へと移っていく。由美子が次第に高まりを感じて、もう少し、というところで、他へ移ってしまうことがある。

そこが仲村と違うところであった。仲村は、指であれ、唇であれ、由美子の様子を見ながら、由美子が心行くまでじっくり愛撫し、責めた。だから、由美子が先に一人で行ってしまうこともあった。仲村は、それも由美子との交歓の楽しみのひとつであった。

女の身体は、いろいろな愛されるところが一般的な感性を備えているわけではない。それを松島に自然にわかってもらうには、もっと逢瀬の数が必要だった。由美子は、快いときには「そこ、もっと・・・」といって松島の手や唇をとどめた。

仲村との逢瀬は、フルコース料理の上げ膳据え膳といえるが、松島とのそれは、週末の男性料理を由美子が手伝うのに似ていた。由美子が、あれこれ希望を述べながら、松島がそれを活かして料理を作っていく。由美子には、それも楽しかった。仲村とは、仲村が自分に入ってくるタイミングをリクエストすることは無かったが、松島にはその意思表示ができた。

十八

由美子が勤めるK社では、産業用資材の輸出入に加え、一般消費財や家電製品の輸入・販売もしていた。提携先の米国企業の製品であるが、その企業の製品をすべて輸入しているわけではなく、日本市場である程度の販売見通しが立つ製品に限定されていた。したがって、全売上に占めるこれら製品の割合は、きわめて少ない。

この度、新たに輸入することになった製品は、家庭用のバキューム掃除機だ。吸引のメカニズムに特許絡みの技術が活かされている。加えて、米国製品にしてはサイズが小さいので、日本市場での売れ行きが期待され、社首脳部は、これを輸入し、ある程度の広告予算を組み、テレビCMもオンエアすることになった。

CMを含む広告等を制作する広告代理店は、A社に決まった。K社とA社は、継続的な業務契約は結んではないが、単発契約で商品ごとに広告を依頼されてきた経緯がある。A社がそもそもK社の輸入製品広告を依頼されたのは、K社の米国の提携先が国際的なネットワークを持つA社にプロモーション活動を委託していたからである。A社の日本支社は、広沢の勤務先でもあった。広沢は、雑誌記者からこの業界に入り、現在はA社のPR局長の職にあった。

A社では、アカウント・ディレクターの有栖川をこの商品のプロジェクト・リーダーにすえ、コピーライター、アートディレクター、メディア・プランナーなどを選んだ。当該製品の販売立ち上がり期には、TVCMを中心にノイズをあげ、それをプリント・メディアでフォローするという大筋の戦略は、K社にすでに了解されていた。

有栖川は、トップレベルの私大を卒業しているが、在学中に米国西海岸にあるマーケティング・カレッジに短期留学したこともある。また、A社に入ってから、顧客の日米共同プロジェクトを担当し、A社のシカゴ支社に一年間、出向したことがあった。広沢が人事部長の頃であった。当然のことながら、英語は堪能であり、それがゆえにA社の重要な国際プロジェクトに加わることも多く、貴重な経験を積んでいった。

いわゆる良家の育ちで、父親関係の財界人の孫娘と高校時代から親しく、両家に祝福されながら、その孫娘が大学卒業と同時に華燭の典を挙げた。都内のホテルで、それは豪華な披露パーティが行われた。

加えて、180センチを超える長身と甘いマスク、そして育ちを思わせる優しい性格と米国仕込みのレディファーストのマナーは、女子社員の耳目を引いた。しかし、本人はとうに結婚し、二人の幼子の父親であることを知るにつけ、女性社員は嘆息せざるを得なかった。その評判は、有栖川がときどき訪れるK社の女性社員の化粧室でも囁かれるほどであった。

その日は、A社が広告の基本展開をキー・ビジュアル 基本となるデザイン）を中心にK社へ数案、提案する日であった。折から来日中の、K社の提携先のワールドワイド・マーケティング・ディレクターも同席するということもあって、言葉は英語で行われることになった。A社のように外資系広告代理店といえども、制作担当者が英語を話せることは例外中の例外ともいえ、有栖川がその部分のプレゼンテーション（企画提案）の通訳をすることになっていた。

プレゼンテーションはK社の役員会議室で行われた。K社からは、社長の降旗、海外担当部長、同担当マネージャー、コミュニケーション部課長、そして、米国提携先のワールドワイド・マーケティング・ディレクター、また、A社からは有栖川をリーダーに、プロジェクト・プランナー、コピーライター、アナートの五人、両社を合わせると十人にのぼった。

由美子は朝から、海外部やコミュニケーション部の秘書と協力して、筆記具や飲み物の

準備に忙しかった。飲み物は、最初はコーヒーか日本茶かフレッシュジュースの希望をお聞きしてサーブするが、後は自由に飲めるように、会議室の一角に白いテーブルクロスを掛けたテーブルを用意してそこへ置いた。そこへ赤い薔薇の二輪挿しをあしらった。

ランチは、近所に評判のサンドウィッチ・ショップがあるので、由美子は店員を社へ呼び、ピクルスなども入ったボリュームの多めでジュシーな特性ランチ・ボックスを頼んだ。提携先の外国人への配慮もあった。デザートには、ライチを冷やしておいた。

パソコン・プロジェクターのセットアップは、女性だけけどこの種の機器の扱いに詳しい由美子の役割であった。すでに何回もしたことがあり、あとは、相手が持ち込むパソコンとの相性をチェックするだけである。

由美子が有栖川と初めて顔を合わせたのは、そのプレゼンテーションの日であった。プレゼンターを勤める有栖川が、コピーライターと共に一行より一足早くK社に到着した。パソコンとプロジェクターとの相性チェックのためであった。応対に出た由美子は、明るいグレーのスーツに身を包んだ有栖川が大股でゆっくりと広いロビーをこちらへ近寄ってくるのを見て、思わず立ち止まってしまった。

何処かで会ったことがある・・・

しかし、そのときは何処で会ったか、どうしても思い出せなかった。会ったことは無いかもしれない。

由美子は、自己紹介と歓迎の挨拶をしながら、滴が落ちる有栖川の傘を持ち替えてあげた。

有栖川と申します。きょうは、よろしくお願いたします」

由美子は、有栖川を見上げて、

お足元のよろしくないところを、よくいらっしやいました。こちらこそ、よろしくお願

いたします。どうぞこちらへ」

由美子は、傘を受け嬢に預けて、有栖川ら二人を会議室へ案内した。

お飲み物は、コーヒーでよろしいですか？」

由美子の問いに、有栖川は、

あ、済みません。お願いします。ブラックがいいです」

有栖川らが一休みする間に、由美子は預かったラップトップ・パソコンとプロジェクターを結線し、電源を通して試写してみた。

あなたが、いつもするんですか？ すごくいですねえ」

有栖川が少し驚いたような顔をしていった。でも、線を繋げるだけですから」

由美子は、そう言いながら焦点を調整した。機器の扱いは、コピーライターの若い男性が慣れているようだった。由美子の説明を聞くと、後は自在に画面の順次送りや、ジャンプ映写をテストしていた。有栖川は、その様子を妙な顔つきで見ている。どうやら、機器の扱いはコピーライターがし、有栖川は口頭説明だけのようであった。

機器のセットアップの間中、由美子は有栖川のことを想い出そうとしたが、どうしても思い出せなかった。ときどき、はしたなくも有栖川の横顔を盗み見してしまった。ややウエーブのかかった長めの髪、ライトブルーのシャツに、青に白い水玉模様のネクタイの組み合わせ。グレーのスーツ。由美子やコピーライターへ話し掛ける口調はマイルドであったが、由美子へは礼儀正しい敬語で話し掛けていた。

由美子は、こんなにすがすがしい男性に久しぶりであったことが無かった。整然とした立ち振る舞いや言葉使い、醸し出す独特の雰囲気・・・、由美子には有栖川に心を奪われていた。

あの、済みません、トイレはどちらです

か？」

あ、はいっ、この廊下の突き当りを左へ曲がったところですよ」

もの思い、それも有栖川のことを思って、やや心ここにあらずの状況のときに、背後からしかも当の本人から直接声を掛けられたので、由美子はとても驚いた。有栖川が遠ざかったあとでも、胸の鼓動が残った。

あの、これ補助資料で、私どもでコピーを作ってくればよかったです。私が、ちょっとうっかりしまして・・・、十セットのコピーをお願いしてもよろしいでしょうか？」

有栖川に、由美子はそういわれて、数枚の資料を渡された。そのコピーを作る時間は十分あった。由美子は、自席のある五階のフロアへと急いだ。

申し訳ないですね」
そういった有栖川の優しい目の顔が、脳裏に焼きついた。

プレゼンテーションは順調に始められたようだった。由美子は自席に戻り業務についた。

由美子は、仲村会長から降旗社長への急用を知らせる電話を受けた。いったん電話を切って、用件をメモにして降旗社長に取り次ぐべく、プレゼンテーションが行われている会議室へはいった。そうすることは降旗の指示であった。

会議室に入って由美子は、思わず立ちすくんでしまった。有栖川が外国人への説明に立っていた。提携先の米国人を相手に手振り身振りで英語で語りかける様子は、映画を見ているようだった。立て板に水のような流暢さではなく、語って聞かせるその話しぶりが自然だったのである。

由美子も人並みのOLのように英会話の習得に精を出したことがあった。ひとりで海外旅行ぐらいはできるが、仕事で使う機会もななく、とても有栖川のように話せなかった。

プレゼンテーションから数日して、由美子

は訪問してきたA社の社員から、有栖川からだといってA社の社用封筒を渡された。それはブランド物のハンカチであった。礼が書かれ有栖川の英文署名が認められたカードが添えられていた。由美子は、すぐにお礼のEメールを送った。

十九

由美子は、自分がどうしてこんなに有栖川に急激に傾いていったのかいまだにわからないでいる。プレゼンテーションのあと両社の話はまとまり、有栖川はしばしばK社に來社することになった。

K社の社内では、両社の「お近づき」の懇親パーティが開催された。冗費節約が慣例のK社では、外部の宴会場を使わず、すし、サンドイッチ、乾き物程度のフィンガー・フーズで軽いパーティをよく社内で行なった。軽いパーティだが外部の人手を使わない分、社内の女性たちは大忙しである。

その苦労を見ていた有栖川は、K社の女性たちへの慰労として簡単な食事を瑤子を通して誘ってきた。瑤子は自分は年だからあなた方で行きなさいと、その話を由美子に持ってきた。

由美子はその食事会で、有栖川と初めて親しく懇談することができた。自分があまり詳しくくない絵画やヨットのことなどを有栖川は優しく語ってくれた。食べ物を取り分けてくれ、ワインを注いでくれ、ペーパーナプキンを取ってくれた。

由美子は、何か魔物に憑かれたように朝晩有栖川のことが頭から離れなくなった。

そうになると、仲村や松島からの誘いにも全然気が乗らなくなってしまう。彼らに会う時間を有栖川に合う時間に振り替えたかった。有栖川には家庭もあり子供がいることは百も承知で、距離をおいてお付き合いをしなく

てはとは思いつつ、自分の情念には逆らいがたい。何回かは固辞したものの、結局、食事をした後の自然な流れの中で由美子は、土曜日の午前中の帰宅となってしまった。アパートの入り口のスイセンが眩しかった。

有栖川との関係が始まってからは、逢瀬が頻度を高め、閨事が濃度を増した。有栖川への愛おしさがつのり、いつでも何処でも一緒にいたいと思うようになった。急激な性欲を制御することが難しい時があった。

有栖川と由美子の身体には、ぴったりと張り付くように反りが一致していた。由美子是有栖川との戯れが終わると、ボクシングの敗者のように微動だにせず、痴態をシーツの上にさらしたままで、どうすることもできなかった。時折、小刻みに腰を痙攣させていた。そんな由美子を有栖川は、あれこれと甲斐甲斐しく介護してやった。

花菖蒲が咲き、暖かい日には少し汗ばむ頃、由美子は妊娠したことを知った。由美子は生みたいと思った。有栖川の子供が自分のお腹の中にいることがとても嬉しかった。まだ、動いたりはいらないが、やがてこの子が動くようになるかと思うと、胸が静かに躍った。お腹をさすった。

有栖川は名家と名家が結ばれるような結婚をしたので、彼が離婚して自分と結婚するなどは到底考えられなかった。二人で話したことはないが、それは二人の暗黙の了解事項であった。

由美子は妊娠を有栖川に告げた。生みたいことも話した。

「いいでしょ？」

由美子是有栖川の顔を見上げた。有栖川は少し間をおいて、

「うん、いいよ」

と応えた。有栖川の表情が嬉しそうなのか

迷惑そうなのか、その時、由美子にはわからなかった。

よかったら、部屋を借りたら？」

こうして由美子は家族と別れて居を構え、今は四六時中幼子と話して暮らしていた。

二十

窓を開け放って部屋の空気を入れ替える。

風はまだ駈蕩とした温もりは孕んでいないが、春近いことを匂わせている。東風ってこんな風かしら。明るい日差しに映える洗濯物が眩しい。

まあちゃん、梅を見に行こうか」

由美子は洗濯物を伸ばしながら、菅原道真の歌でも思い出したのか、自分の幼子にそう話し掛けた。

もう少し待っててね。すぐ終わるから」
寝かされたままの幼子が、手足を振っている。

二十一

梅園から少し離れたところには、嬉々とした子供たちの遊び声が聞こえる一角がある。公園の傾斜地を利用した遊び場で、遊具はすべてボランティアの大人と子供たちが作ったものである。遊具とはいっても、廃材を活用した大きな滑り台や掘っ立て小屋のようなものである。

焚き火が常時たかれ煙を上げている。水が地面を流され、子供たちは泥んこになって流れを作っている。手作りのブランコは高い木からつるされ振幅の幅が大きい。

秘密小屋」が木の上に作られ、子供たちは思い思いの野性的な遊びに興じている。みんな泥んこで、洗濯機にはさぞかし泥が詰まることであろうと思われる。プラスチックと鉄で構成された商業施設の遊び場では子供はこれほど夢中にはなれない。広沢はそう思っ

た。

広沢もかつてはここで息子を良く遊ばせたものだ。暗くなるまで帰りがらなかった。懐かしくなった広沢は、ここで暫し当時を懐かしんで、再び梅園の方へ足を向けた。

梅園には相変わらず、梅花にカメラを向ける人が多い。白加賀や鴛鴦など広沢も名を知っている種類もあるが、知らない方が多い。一つの木に白、紅、ピンクと三色の花をつけるものもある。

各地の梅園めぐりをしているような中年夫人もいて、説明版の前では自主的に自分の説明も加えて、来園者に喜ばれていた。

梅園の一隅には見過ごしそうではあるが、菅原道真が左遷された大宰府から枝分けされたと言う紅梅・白梅が、あまりにも有名な歌の歌碑と共に対で植えられている。

軟らかな日差しの中に、白や梅色の花がもう少して満開という中を、広沢は、さて帰ろうか、と思ったときだった。汀女の歌碑の向こうの方に気になる人影を見つけた。乳母車を押す若い女性だ。

誰だろう。

どこかで見かけたことがある。

若い女性は子どもに話し掛けるように、梅の花を指している。

広沢は、女性の顔が見えるように回り込んだ。

「・・・」

それは、もし広沢の記憶に間違いがなければ、銀座の割烹「紬」でよくあった由美子に違いなかった。広沢は歩幅をそっと拾うように由美子に近づいていった。いろいろな人が梅を見に来ているので、由美子にしても中年の男性が近づいてきたからといって、取り立てて気にすることはなかった。

あのう、突然で恐縮ですが、ひよっとして由美子さんじゃないですか？」

それを聞いて由美子は、すっと体を起こして広沢を大きな瞳で見つめた。

「やだあ、広沢さんですか」

驚きの思わぬ大声に、由美子は自分の口を手で覆った。

二人の再会は七、八年ぶりだった。

「いやあ結婚したとは知らず、すっかり失礼したね。最近はや遊びも減って、銀座もほとんど行っていない。まったく知らなかった。いやあ、ごめん、ごめん」

昔と変わらぬ広沢の屈託ない明るさに、由美子は安堵した。久しぶりに心が晴れるものがあった。

由美子は成り行き上、有栖川のことを言いそびれ、新婚の妻を演じざるを得なかったが、広沢が離婚した事を知り、あっと思った。

その頃、由美子は広沢に惹かれるものがあった。広沢にしてみても「魚心あれば水心」的なところがあったが、由美子が得意先の社長の秘書ということもあって、あまり積極的なことは差し控えた。

そんな広沢の心境はいざ知らず、由美子は広沢の完璧なまでのよきパパ振りに圧倒され、気持ち以上に前に進むことが躊躇われていた。その広沢がひとり暮らしをしているなんて・・・。

由美子はこれまでの人生の中で、何か大事な落しものをしてきたような気がした。

了)